



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニーチェの梅毒意識
Author(s)	古内, 武
Citation	北海道大学人文科学論集, 13, 141-176
Issue Date	1976-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34320
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_PL141-176.pdf



ニーチェの梅毒意識

古 内 武

目次

1. 病気との戦い
2. 晩年の遺稿より
3. 従来の研究
4. 梅毒と薬
5. 初感染前後
6. 「悲劇の誕生」と戯曲「エンペードクレス」計画
7. 1873年の眼痛
8. 精神的悩み
9. 梅毒意識と道德
10. 隠匿、沈黙、仮面

まえがき

ニーチェについては医学の面からも道德哲学の面からもさまざまな研究が徹底的と言える位に行われてきたけれども、その両面を結び付ける契機が見出されなかったために、「ニーチェの梅毒意識」は諸研究の間を巧妙にすり抜けて今日に到った。筆者の研究はまだ初歩的で未熟極まるものであるが、ニーチェに対して筆者の得た観点は、道德心理学的もしくは「道德生理学」的研究を刺激し得るばかりでなく、如何なる面からのニーチェ研究にとっても不可欠であると考えるに到ったので、敢て発表する次第である。

1. 病気との戦い

ニーチェの生涯の跡を辿る者は、彼の病気の物凄さに圧倒されざるを得ない。余りにも悲惨なのである。「不断の苦痛、一日のうちの数時間は船酔いそっくりの感じ、物を言うことが困難になる一種の半麻痺、転換時には激烈な発作（前回のは三日三晩の嘔吐を強要しました、私は死を渴望しました）」（80年1月、ナウムブルクからフランクフルトの医博オットー・アイザー宛⁽¹⁾）。「私の状態の描写は昨年 averages に依ったのです。例外に依ったものではありません。統計的には、重症の発作の日が118日ありました。比較的軽い日は勘定しませんでした。いつもの状

態、つまり、頭の中と眼の上の不断の痛みと圧迫感、頭から足先までの麻痺した様なあの全体感情を描写して差し上げられるといいのですが！——私の妹は最も良い時の私を見たのです。私自身も望みを持ってそんな気持ちに誘われていました」(同年2月初め、同博士宛⁽²⁾)。これらの手紙はトーマス・マンが「我々の経験に照らして見たニーチェ哲学⁽³⁾」で引用しているものであり、ニーチェは正に拷問に堪え続けたのである。超人的な摂生生活をしながらである。87年4月14日のオーヴェルベック宛の手紙には、「自分たち自身が堪えられないと感ずるきびしさで身を処している者があることを認めさせられることほど人々の癪にさわることはない⁽⁴⁾」という言葉が見られる。天候、気温、住居、交際、食餌に対する極端なほどの配慮はニーチェ書簡の随所に現われている。医者 の 無能を知ったニーチェは自分で自分の医者となり、色々な薬を自分の身体に投入しながら、悪魔の様な病氣と戦ったのである。その地獄的な戦いに彼を堪えさせたのは彼の仕事であった。彼には、それを仕遂げなければ死んでも死に切れない仕事があったのである。そして彼の仕事ぶりときては！彼の生活が常人には不可能なものであったことを、ニーチェ書簡に親しんだ者は、とくと納得させられる。

無論彼の身体は次第に弱って行った。87年9月にズィルスで彼に会ったドイセンは後にこう書いている、「しかしこの間に何という変化が彼に生じていたことか。⁽⁵⁾かつての誇らかな態度、しなやかな足取り、流暢な話しぶりはもはやなかった。本当に骨折りながら、そして少々横に傾きながら、やっと歩いているという様子だった、そして彼の話しぶりは時々ごちなくなり、つかえる様になった。彼の好調の日ではなかったのかも知れない⁽⁶⁾」。発作が起りそうになると彼は身を隠した。少数の目撃者の一人であるズィルスの家主が語ったという言葉が伝えられている、「あれはそこらにある様な頭痛ではありませんでした、あれは全く特別なものでした。そして再び起き出してきた時の姿は本当にみじめでした⁽⁷⁾」。嘔吐を伴う激しい頭痛にひとりで堪え、ひとりで始末をしながら、彼は戦闘者としての自負心を失わなかった。87年秋のノートにはこう書かれている、「自分自身を恥ずかしく思っている不幸な人たちは私は愛する。彼らは惨めな汚物で一杯になった自分の尿器を路地にぶちまけたりせず、『自分の不幸を尊重せねばならぬ、これを隠さねばならぬ』と自分自身に向って言うだけの立派な趣味を心と舌に残している⁽⁸⁾」。彼の不幸の象徴であるこの尿器は今もなおズィルスのニーチェの部屋に保存されて多くの見物客の眼にさらされている。

最初から引用文を沢山載せるのはどうかと思うけれども、以上のものだけでは矢張り足りない様に思う。「善悪の彼岸」289節の末尾、「どの哲学もさらに一つの哲学を隠している。どの見解も一つの隠れ場であり、どの言葉も一つの仮面である」。続く290節、「深い思想家はいずれも、誤解されることより理解されることの方を恐れる。前者によっては彼の虚栄心が傷つくかも知れない、しかし後者によって傷つくのは彼の心情、彼の共同感情である。それはいつもこう言っているのである、『ああ、何故君たちは、僕と同じ様に苦しい生き方をしようと思ったり

するのか?』と」。

人間にこういう種類の苦しみを生ぜしめる病気は何であるのか。分る人には分る筈の病気であった。可成りの人たちに分っていたに違いない。しかしその人たちは口に出さなかったのである。黙って堪える他ない病気であり、救いの手を差し伸べるわけには行かない病気であった。だから矢張りその人たちも黙って彼の悲劇的前進を見守っている他なかったであろう。

ニーチェは隠した。発狂するまで隠し通した。彼の病気は人に知られてはならない病気であった。知られた時には彼はお終いになるのだった。無論、「言っしまえ、そして碎けろ」という声が彼の耳に響くことはあったであろうし、「十字架へ這って行く」自分の姿が眼に浮ぶこともあったであろうが⁽⁹⁾、彼は自分の内体験の一切に芸術的な衣を被せることを心得ていた。そして彼は彼自身の弱さと徹底的に戦い通した。彼は「堅く」なって行った。

「人間的」Iの615番に、「偉大な思想家が憂鬱な自虐に陥った時に自分自身に言うであろう」ところの言葉が載っている。「この寄生虫 Parasit を養い育てているのは、お前自身の大きな力なのだ、もしその力がもっと少なければお前はもっと少ししか悩まないですむだろう」。そして617番の表題は、「個人的欠陥の上に種子を蒔いて収穫すること」である。ニーチェは病気を徹底的に利用し、病気そのものを隠し通して、そして狂人となった。そして後には、「行間の秘密を読み取る⁽¹⁰⁾」ことを必要とする一連の著作が残った。

その他にはあちらこちらの滞在地にノート類が残っていた。これらは後に、妹の管理下に入った。さらに残っていた目立つものは多くの薬瓶であった。妹が最も気にしたのはそれらの薬瓶だったのであるが⁽¹¹⁾、その内容が公表されたという話はまだ筆者の耳に入っていない。

このような次第だから、研究者にとって不都合な事情があったことは確かである。しかしそれにしても、ニーチェ研究者が、ニーチェの場合に梅毒意識の証拠がないという通説を鵜呑みにして、自分で探すことをしなかったのは不思議である。探す気になった形跡さえ見当らないのである。筆者自身もニーチェに触れてから30年以上経って、やっとニーチェの謎を解くための鍵と思われるものに辿りついたのである。

ニーチェは言うべきことは公刊の著作の中で凡て言い尽くしてから発狂したのだというハンゼル版後書におけるシュレヒタの主張は確かである。ニーチェ文庫が「権力への意志」として、そしてその後にも多くの野心家がさまざまな形で編集した遺稿集は、ニーチェの捨てたカスである。捨てられたものの中にも大いに興味をひくものはある。しかしそれらの多くは、現在進行中のグロイター版によって陽の目を見るまでは隠されてきた。それらの若干を紹介しながら筆者の「鍵」をもっとはっきりさせることを次に試みたいと思う。

注

ニーチェの作品、遺稿、書簡はグロイター版で既に刊行されたものはそれに依り、然らざるものはベック版とハンゼル版に依り、やむを得ぬ場合にグロース・オクターフ版とニーチェ書簡全集その他を利用した。略号

は下記の如くである。

グロイター版作品篇=KGW

同書簡篇=KGB

ベック版作品篇=BAW

同書簡篇=BAB

ハンゼル版=Hanser

グロース・オクターフ版=GOA

書簡全集=GB

- (1) Hanser, Bd. 3, S. 1162
- (2) GB, Bd. 1, 4. Aufl., 1902, S. 447
- (3) Thomas Mann: Nietzsches Philosophie im Lichte unserer Erfahrung, Suhrkamp Verlag, 1948, S. 12
- (4) Nietzsches Briefwechsel mit Overbeck, Insel Verlag, 1916, S. 374
- (5) ドイセンが前回ニーチェに会ったのは72年7月末バーゼルにおいてであり、15年近い歳月が流れていた。
- (6) Paul Deussen: Erinnerungen an Friedrich Nietzsche, 1901, S. 92
- (7) P. J. Möbius: Nietzsche, 3. Aufl., 1909, S. 145
- (8) KGW VIII 2, 10 [141]。これは1901年版の「権力への意志」(ガストとホルネファー兄弟との共同編集)には載せられたが、その後は削除された。
- (9) vgl. KGW VI 1, S. 184, 222, 228
- (10) KGW III 2, S. 141 (und auch S. 256)。連続講演「わが国の教育施設の将来について」を出版する場合のための序文中の言葉である。この講演の第5講の中に「諸君は罪を負わされたこの無垢の者がひとり呟く秘密の言葉を理解せねばならない」という箇所がある(ebd. S. 236)。この者は大学生ということになっているけれどもニーチェ自身を指していることは疑いない。罪なくして罪を負わされた彼は、この講演においてもその後の生涯においても、その秘密の言葉を口に出しはしなかった。
- (11) 「トリノーにおける妹の探索は主として、ニーチェが自分の部屋に並べていたそしてそこに残っていた薬瓶に関係していた」(Bernoulli II, S. 513)。

2. 晩年の遺稿より

グロイター版ニーチェ全集VIII 3には88年春から89年1月初めまでの遺稿、即ちニーチェ最後期の遺稿が集められている。その251頁の15〔84〕は次の様なものである。

「心わびて」いるのは事実だ。問題は「なじかは知らぬ」ことである……「昔のつたえ」

「古いつみびとなのさ」とクリスト教徒なら言うところだ。別の場合、ハイネの場合には、「ローレライの仕業」だった。

フリードリヒ・ズィルヒャーの曲によって誰でも知っているハイネの詩がニーチェを捉えているのである。前半は近藤朔風訳を借りて訳してみたが、88年春、ジェーノヴァ滞在中のものと考えられるこの一文には、梅毒と戦いクリスト教と戦ってきたニーチェの悲痛な想いと疲労

感とがこもっている様に思われる。「事実として存在するのは、私が実に悲しいということだ。問題は、私にはそれが何故だか分からないことだ」とニーチェは言っているのであるが、彼には分っていたのである。病苦と罪概念とに対する戦いの十数年を余儀なくせられ、四十三歳を越えたばかりでもう、いつ斃れるか分からない老人になっているのは、昔のおとぎ話の様な過ちの故であった。無論ニーチェはそれを過ちとも罪とも認めたことはなかった。「そんなに悲しい想いに捉われているのは、昔つみを犯した男に決っている、とクリスト教徒なら言うところだ」という意味の皮肉な述懐は彼の依然たる抵抗を示している。クリスト教的な罪と罰との概念に対する彼の抵抗は彼の病気が重くなればなるほど頑固になってきたのだった。彼の心の奥底の苦痛を知らぬ人たちが彼の窮状に寄せる表面的同情は彼にとっては迷惑であった。「コノ人ヲ見ヨ」ではこう言っている、「私が同情的な人たちを非難するのは、……同情の手が往々にして一つの偉大な運命、痛手を負っている孤独、重い罪科を荷なう特権の中へ正に破壊的に突っ込まれる場合があるからである⁽¹⁾」。クリスト教世界の清潔と誠実と誇りとを具現していたと言ってもよい人物が、クリスト教道徳によって罪と見なされている病気に苦しめられる様になった時には、十字架へ這って行かないとすれば、クリスト教撲滅以外に「晴れやかな良心」を獲得する術がなかったのであり、彼はその孤独な戦いの運命を特権とさえ見なしたのである。しかし何と悲しい特権であったことか！

同じグロイター版Ⅷ3の23〔1〕(409頁。88年10月のもの。いわゆる「権力への意志」には734番として載せられている)は、「子供が犯罪であるかも知れない場合がある。慢性病患者や強度の神経衰弱症患者の場合である」という文で始まっている。この箴言の前段階と見なされるものが15〔3〕(195頁以下。88年春のもの)である。これの終りの部分は次の如くである。「自分自身が存在権を持たぬ世界の中へ一人の子供を生み出すことは、一つの生を奪うことよりも悪い。子供を作る梅毒患者は間違った生の長い連続の原因となる。彼は生に対する一つの反証を作り出す、彼は実行のペシミストである。実際、彼によって生の価値は途方もなく減殺される」。この箴言は前掲の15〔84〕と同様に初めて公表されたものである。序でながらⅧ3の34〔104〕(85年4月から6月までの間のもの。やはり初めて公表された)はドイツ人に関するものであるが、その中のドイツ貴族の墮落を指摘する箇所に「梅毒」の語が出てくる。「家に留まった者はアルコールにやられ、出て行って戻ってきた者は梅毒にかかっていた」。常に仕事のことが頭にあったニーチェのノートは本当の意味の私的ノートではなく、彼は「梅毒」或いは「梅毒患者」という言葉をも他の重要な内的体験と同様に、一般的な場合にのみ用いた。転々たる生活をした彼はノート類一切を持ち歩くわけには行かなかった。しかも彼は何時路上に倒れるか分らぬ身体であった。世の中におちまけることの出来ない不幸は、彼の心の奥にしまい込まれていた。

もう一つ見付かった「梅毒患者」の例をも紹介しておきたい。Ⅷ2の10〔100〕(87年秋のも

の。これも初めての公表)である。「犯罪性と病気とに対する戦いにおいては去勢を採用しても良からう(従って凡ての梅毒患者に関しても)。だが何のためにか!もっと経済的に考えねばならない!」。梅毒に特別な関心を持っていない者が括弧内の文を記すであろうか。さらに、「犯罪性と病気」は一語になっている⁽²⁾。梅毒は道徳的な罪の象徴であるばかりでなく、感染する。梅毒患者は毒をまき散らす犯罪性を体内に持っているのである。ニーチェは、梅毒患者は去勢などという面倒なことをせずに単的に消滅させて然るべき存在なりと考えている様である。

ところでニーチェの箴言はその前後のものとの関連において見られる時に一層興味あるものとなるのであり、既に挙げたVIII 3, 15 [3] の場合には、その次に売春弁論論が続いている。このVIII 2, 10 [100] の前後にはショーペンハウアーからの抜き書きが多くあって、次の10 [101] はパレルガから短い文を引いているのであるが、ニーチェの付した表題「罰と償いとしての存在」は注目に価する。この観念こそニーチェが抵抗し続けた当のものであり、彼を圧倒することがしばしばであったに違いないものなのである。然し今はニーチェにおける罪、病気、罰、償いなどについて述べることは省略して、これらの道徳的かつ社会的な概念が彼に付きまとう様になった所以のもののみを的をしぼりたいと思う。

公刊されたニーチェの著書に「梅毒」の語が出てくる箇所がある。「道徳の系譜」の第3論文第21節の末尾である。「ヨーロッパ人の健康と人種的精気とに破壊的な作用を及ぼしたもの」として禁欲主義的理想の次にアルコール中毒が挙げられ、そしてさらにこう付け加えられている、「三番目には梅毒が挙げられよう——ダガ大分間ヲオイテ続イテイル⁽³⁾」。「健康」にアンダーラインを付けたのは無論ニーチェ自身である。ヨーロッパ人の健康を考えた場合にニーチェは、ふと思いついたかの如き体裁で、梅毒を付け加えているのである。VIII 2 の10 [100] の場合と同様である。晩年のニーチェは公刊の書においてもこの様な「小さな尻尾⁽⁴⁾」を付けたのであり、ひそかにスリルを味わっていたことであろう。

88年に入ってからニーチェは lähmen「麻痺させる」、lähmend「麻痺的」の代りに paraly-sieren, paralytisch を用いている場合があり、しかもその場合にはアンダーラインを付けている。これらは医学的専門用語であり、彼は敢てそれを使用しているのである。88年春の遺稿⁽⁵⁾に「ニヒリズム的宗教の生理学」と題されたものがあり、「典型的な病気循環」と記された後に「覚書」が載っていてその中に「麻痺^{パラーティシユ}性の諸徴候」という語が出ている。そして「偶像の黄昏」の「或る反時代人の遊撃」41節では実に目立つやり方で パラリズィールト が用いられている⁽⁶⁾。

敢て医学用語を用いている例をもう一つ挙げよう。Hemiplegie「半麻痺」である。既に引用したアイザー博士宛の手紙の場合には Halb-Lähmung が用いられていたのであるが、88年春の遺稿に「善人。あるいは、徳の半麻痺」と題せられた興味深い長文があり、「半麻痺」は Hemiplegie が用いられている⁽⁷⁾。そして文中の「この半面の有能性」における「半面の halbseitige」にアンダーラインが施されている。この様な具合に自分の症状を強調するのは矢張り目立つことで

ある。

ニーチェは自分の身体に現われているものがパラリーゼの諸徴候であることを疑う気持を失っていたばかりか公刊の書においても敢て危険を冒すところまでできていた。もはや眼が（半盲目の眼が）すわっていたのであり、最後の没落の覚悟の上に立って、自身の芸術家性を極端なところまで押し進めて行ったのである。晩年の遺稿についてはこれで打切るけれども、少なくとも、ニーチェが梅毒を意識していたということだけは明らかにすることが出来たと思う。

しかしながらニーチェの梅毒意識の歴史は二十年以上に亘るのであり、意識の中味は実に実に複雑であり、意識の仕方は変化の限りを尽くした。従って彼の梅毒意識は、一人や二人の研究ではどうにもならない広さと深さを持っているのである。筆者が欲するのは、先ず、ニーチェにおける梅毒意識の確実性と重要性とが納得されることであり、次には、もし筆者の考えが間違っているとしたら速やかに撤回したいということである。以下においては肝腎と思われる事柄についてそれぞれ大まかに述べて行きたい。

注

- (1) KGW VI 3, S. 268
- (2) Verbrecher-und Krankentum.
- (3) 片仮名の部分はラテン語である。この部分の従来の翻訳に疑いを持った筆者は田中利光氏（古典語）に頼り、ヴェルギーリウスの例を引いての懇切な説明を頂戴した。
- (4) 88年5月4日のブランデス宛の手紙にはこう書かれている、「私は実に心軽く、元気で、上機嫌です——厳粛極まる事物にも、おどけの小さな尻尾を付けてやります」(Hanser III, S. 1292)。ところでSex im Volksmund (Rowohlt, 1971) によれば、男性の性病を示す俗語に「尻尾の病気」というのがある。ニーチェはそのことを知っていたかも知れない。
- (5) KGW VIII 3, 14 [13]。これは、いわゆる「権力への意志」に1039番として載せられているが、省略部分がある。
- (6) KGW VI 3, S. 137
- (7) KGW VIII 3, S. 265。表題全体にアンダーラインが施されているのは、ニーチェの習慣である。いわゆる「権力への意志」では351番であるが、表題の後半のアンダーラインが失われている。

3. 従 来 の 研 究

梅毒感染に関するニーチェ自身の陳述が一般に知られる様になったのは、ポータッハの著「ニーチェの崩壊」(ハイデルベルク、1930年刊)においてバーゼル、イエーナ両病院の病歴が発表されたことによってである。「患者はオーヴェルベック教授とミーシャーとに伴われて来院」という文で始まっているバーゼル病院の病歴の第1日⁽¹⁾は次の文で終わっている。「二回特殊感染をしたと陳述する⁽²⁾」。イエーナ病院の病歴の第一日⁽³⁾の「3. 履歴」の中に「1866年、梅毒感染⁽⁴⁾」という箇所がある。後者に関してポータッハは詳細な注を付けているのであるが、医

師がこの箇所を記すに到った根拠については「満足な解答を求めても空しい」と述べている⁽⁵⁾。バーゼル病歴の前掲箇所には彼は特に注意を払わなかった。

ポータッハの書を読んで、ニーチェが隠していたという可能性に初めて触れたのはヘルムート・ワルター・ブランである。彼はその著「ニーチェと女性たち」(ライプツイヒ、1931年刊)の後書「純潔とパラリーゼ」において、バーゼル病院でのニーチェ陳述とイエーナ病歴の前掲箇所とをポータッハ書から引用した後にこう述べている(205頁以下)、「あの方の出所ははっきり確かめられないけれども、前の記載はニーチェ自身から出ている。本人の陳述を疑うべき根拠は全くない。パラリーゼ患者も、凡ての精神障害者と同様に、全く理性的な信用出来る発言を行う時が多い。かつ、狂乱的な『からいばり』とか『誇大妄想』とかはここには認められない。勿論、次の一事が我々には奇妙に思われる。平生、手紙や私的記録において、否、著作においてさえ、大好調の積りでも実際は残念ながら大抵実に不安定であった健康状態についてあんなに詳しく述べ、時には気候や食事についての療養関係の小論文とも言えるものを書いてあるニーチェが、この感染もしくはその結果についてほんの一言も触れておらず、ほのめかしさえしていないのは何故だろう?彼の『腹心の人たち』の誰にもそのことを知らせなかったのは何故だろう?さらに、彼の色々な秘密のメモの中にこの点に関することが全く載っていないのは何故だろう?彼の書いたものは凡て、純粋な『履歴書』の作製に向けられたものなのだろうか?これらの疑問に対しては二つの解答しかない。その様な資料が実際には存在していて何れの日かに現われてくるのであるか、もしくはニーチェ自身が健康な時期にその関係のものを凡て消滅させたかである」。ニーチェが知っていたのだということを強調しているこの発言は、今までにニーチェの梅毒意識に関してなされた最も重要なものである。しかるにブランの関心はニーチェの性交の点にのみ向けられ、性交は本人の陳述した二回に限られるという主張に入って行った。ニーチェの梅毒意識が女性たちに対するニーチェの気持に影響しなかった筈はないということに彼が気付いたとしたら彼は彼の「ニーチェと女性たち」を全面的に書き直したであろう。

ところで横にそれるが、ブランは「後書」の最終頁において、二回の性交で二回とも感染するということがニーチェの場合には大いにあり得ると主張した後に、「ニーチェは何れの場合にも感染を——内面的な贖罪の理由から——意識的に招き寄せた様に思われる」と述べ、オートー・ワイニング、ゼーレン・キェルケゴールにも同様の事情があったのではないかと推測している。贖罪の気持の故に意識的に感染したというのはフラークの言う如く「分りにくいデーゼ」⁽⁶⁾である。意識的に感染するということはそもそも不可能であろう。しかし梅毒感染の懸念から生じた悩みがあったという可能性は、少なくともキェルケゴールの場合には、ニーチェの場合と同様に、否定し得ない様に思われる。女性(彼の場合には婚約者)に対する彼の矛盾的态度と彼の思考内容との故だけではないのであって、筆者はヤスパースの次の言葉を見付けた

のである。「キェルケゴールは『人間の審判を回避してはいけないから』と医師を訪れたが、これは彼にとって罪であるものを恐らくはつきりと、争うべからざるように病と認知する必要があるであつてもあつた。彼はもちろん深く失望した」(内村他訳「精神病理学総論」中巻、昭和38年第8刷、岩波書店、188頁)。キェルケゴールの場合も、梅毒の決定的診断が不可能だったことは言うまでもない。ヤスパースが梅毒意識の観点からキェルケゴールとニーチェを考察しようとしなかったこと、調べてみようと思ひしかなかったらしいことは、不思議であると同時に実に残念である。「ニーチェの梅毒意識」という観点は、医学者によつても哲学者によつても取り上げられることなく、ブランの直観はブラン自身によつてもその後のニーチェ研究者によつても生かされなかった。しかしブランはトーマス・マンの「ファウスト博士」の成立過程に若干の貢献をした様である。

作家トーマス・マンは若い頃から情熱的なニーチェ読者であつたばかりでなく、並ならぬニーチェ研究者でもあつた。ニーチェ関係の読書を彼が如何に熱心に行なつたかは、「ファウスト博士の成立」を見るだけで分る。ブランの「ニーチェと女性たち」を彼が読んだのは1943年である⁽⁷⁾。マンが「我々の経験に照らして見たニーチェ哲学」の中でニーチェの二度目のケルン行きと感染のことを述べた際に「意図的にだ、自己処罰としてだ、と或る人たちは言っている」と付記しているのは主としてブランを頭に置いてのことであつたろう。マンがニーチェの「隱匿」の可能性を強く感じていたことは同書から明らかである。既述の如くアイザー博士宛ニーチェ書簡二通を引用した後に、彼はこう書いている。「これらの悩みの性質と源泉とについて彼が全く知らなかったらしいこと——そして彼の医者たちまでも！——は理解し難い」(12頁)。マンはこの点をさらに掘ってみるには到らず、梅毒意識、梅毒隱匿の問題は「病氣」と「天才」との間に埋没してしまつた。

パラリーゼに終つた人たちの運命から作り出された⁽⁸⁾「ファウスト博士」は無論、小説である。悪魔と契約しての梅毒第三期の生活にあつては、病氣は常に確實で決定的なものとして存在している。しかし、ニーチェの場合には、梅毒が直つたかどうかの決め手が無かつたのであり、彼は「確實性」と「不確實性」との間に揺れ続けたのである。ニーチェにおいては、この二つの概念が梅毒の厄介な性質と密接に関連していることは疑いないのであつて、これについては後に述べる折を見付けたいと思う。

次に、「ファウスト博士」の場合は、契約であるから、罪と罰の問題が欠落してしまい、最後に懺悔することで終るのであるが、ニーチェの場合は道徳問題が彼の後半生を支配したのである。マンはニーチェを「孤独に生れついてはゐなかつたのに犯罪者の孤独を宣告された人」と言つており⁽⁹⁾、これは鋭い言葉である。しかし「犯罪者の孤独」は適當でない。罪がないのに拷問を受ける不運にぶつかつた、というのがニーチェの実状であつた。精神的悩みが生じた。そして次第に彼は、梅毒を罪の報いと思はすクリスト教道徳と戦わざるを得なくなつた。その彼

の上に、あたかも神罰であるかの如くに、次々と発作が襲ったのである。彼は暗くなり、激しくなっていた。しかしそれは、彼が犯罪者だったからではないのであって、不当な運命を取り除くことが絶望的だったからである。苦しい、しかも不治の病気であった。その上に恥辱とされている病気であった。いかなる人間をも絶望せしめ得るであろう窮地からの脱出を試みる彼の心の中には我々二十世紀の、しかも異教世界の人間の想像出来ない様な苦悶が新たに繰返し訪れたであろう。くじけそうになる時もあったであろうし、十字架へ這って行く者の気持をも理解し過ぎるほどに理解したであろう。それらを暗示している様に思われる言葉は多い。しかし彼は進んで行ったのであり、最後まで傲然たる面を失わなかった。沈黙を余儀なくされていることが彼を犯罪者の心理に通曉せしめたことは確かであるが、沈黙者の孤独は犯罪者の孤独とは違うのである。

意を尽くさぬ説明ではあるが後に補うことにして、とに角、「ファウスト博士」の主人公は梅毒及び罪との関係において既にニーチェとは異なっている。しかし、ニーチェの内的外的な事情をかなりにふまえて梅毒の神的芸術家を作り出したマンは、ニーチェの梅毒意識に関心を抱いた少数の人間の一人ではあった。

バーゼル以前のニーチェの伝記として出色のものであるブルンク著「ニーチェ。青少年時代」(1953年刊)はニーチェの病気についての傾聴すべき言葉を到るところで(特に100頁以下及び160頁以下は重要)述べているのであるが、梅毒意識については次の如き見解を出していない。即ち彼は、医学研究の現状とライブツィヒでの梅毒治療に関するランゲ＝アイヒバウムの報告とに従ってニーチェの麻痺の梅毒起源を確実と認めざるを得ぬ旨を述べてからこう書いている、「しかし治療した医師たちはニーチェに、彼の病気の悪い性質とそれがいずれもたらす結果とについて説明しなかったのだという考えが先ず頭に浮ぶ。そうでなかったとすれば、それに関する彼の証言が1890年までは一つも見当らないということの説明がつかないのである。ただし、ニーチェ文庫で一切の痕跡が抹殺され絶滅されたか或いは何時の日かに姿を現わすという場合を除いての話である⁽¹⁰⁾」。これはブランの水準を越えるものではない。ニーチェの隠匿、沈黙は、徹底していたのだ。しかも彼一流のやり方で表現していたのだ。これをブルンクは突きとめていない。しかし病気に対するニーチェの態度についてブルンクはこう書いている、「この病気(1868年3月初めに軍隊で落馬して以後の病気——訳者注)は確かに、一つの純粋な災難から発展してきたものであった。しかし、偶然、あるいは偶然の様に見えるものをも、運命として受け取ること、そしてまたそれを自身によって、かつ、自身をそれによって、恐るべきものにして行くのが、常にニーチェのやり方であった。それでこの場合にも、後には一層その度を強めたのだが、病気に対して或る特別な態度を取った。病気がどんなに彼を妨げようと、否、時には彼を麻痺させる様に思われても、彼は自身の思考と自身の生感情のために、常にその病気から、単なる健康人の決して味わい得ないあの美味な蜜を取り出すことが出来た。彼の

異常な心理学的明晰さの由来はここにある⁽¹¹⁾。これは含みの豊かな叙述であり、ニーチェにおける梅毒自覚の可能性を彼は強く感じている様に思われる。ただしこの叙述は、1867年2月20日のゲルスドルフ宛ニーチェ書簡に基づいていることは確かであり、落馬後の病氣と関係づけて述べられるべき内容ではない。かつ、ブルンクは189頁において、落馬後の胃病をニーチェの初めての胃病としているけれど、ゲルスドルフ宛書簡の直前の家族宛書簡によれば67年1月に激しい胃と咽喉のカタルでニーチェは臥床しており、ブルンク自身も177頁でそのことに触れている。ブルンクはゲルスドルフ書簡の利用場所を誤ったのだと言わざるを得ない。217頁以下の「背後の姿と声」（これについては後述）に関する叙述にも難点はある。それでもブルンクがニーチェと梅毒との関係を追いつけていることは確かであると思われ、彼の書の序文で予告されている「続く二つの巻」が姿を現わすことが強く望まれる。空襲の被害を免れたという原稿を彼は訂正中なのであろうか。現状の分らないことがもどかしく感じられる。

注

- (1) 1889年1月10日。ニーチェたちはこの日の朝7時45分にバーゼル到着、直ちに辻馬車で病院へ行った。vgl. Bernoulli II, S. 234 f. ミーシャーはオーヴェルベックがトリノーで見付けて助力を頼んだドイツ系ユダヤ人の歯科医である。vgl. ebd. S. 496
- (2) Podach: Nietzsches Zusammenbruch, 1930, S. 110. 陳述の言葉 zweimal spezifisch infiziert は、ランゲ・アイヒバウム著、栗野訳「ニーチェ」（みすず書房、昭和34年）の20頁で「梅毒に二回感染した」と訳されていて、それはそれで良いのだけれど、筆者は敢て「特殊」と訳しておく。spezifisch の語は「標準医語辞典」（南山堂）によっても「特殊」の意味と共に「毒性性」の意味を持っており、ニーチェが梅毒以外の伝染病を意味した可能性はないのだけれども、疑いをはさむことは出来る。たとえばオットー・フラーク著「ニーチェ」（初版1946年、改訂版1947年）においてフラークはイエーナ病歴記載の「1866年感染」についてはニーチェの陳述によるものと考えているのだけれど、バーゼル病歴の「特殊」については、ニーチェがその意味を解せず「二回の淋病」を告白したのだという可能性がある旨を述べている（改訂版171頁以下参照。）さりながら彼は、淋病がニーチェの意識の中にあったという証拠を挙げてはいない。
- (3) 1月18日。この日の午後にニーチェは母親とバーゼルの医師メーリ博士（ニーチェの旧同僚の長男で、ギムナジウム時代にニーチェの熱狂的生徒であった）とに付き添われて病院へ行った。vgl. Bernoulli II, S. 236 u. 497
- (4) Podach, ebd. S. 118. この箇所は既にベルヌリ書第1巻432頁で公表されていた。なおメービウスもバーゼル及びビューナの病歴の内容を知っていたことは、その著「ニーチェ」（初版1902年、再版1904年）の終章によって明らかである。
- (5) Podach, ebd. S. 158. ただしボーグッハは「ニーチェのノート瞥見」（1963年）では見解を変えるに到り、「疑いもなく患者の陳述に基づく」としている。vgl. Podach: Ein Blick in Notizbücher Nietzsches, S. 159
- (6) O. Flake: Nietzsche, 2. Aufl., 1947, S. 170
- (7) vgl. Thomas Mann: Die Entstehung des Doktor Faustus, Fischer Verlag 1966, S. 20. マンがブランの書を読んだのは、以前から持っていた「ファウスト博士」の計画を実行に移そうと考える様になってからのことである。ブランを読む前年の秋にはボーグッハの「ニーチェの崩壊」をサロメ嬢の書と共に丁寧に読み返している。vgl. ebd. S. 15
- (8) vgl. Thomas Mann: Briefe 1937-1947, S. Fischer Verl. 1963, S. 309
- (9) vgl. T. Mann: Nietzsches Philosophie, S. 6

(10) R. Blunck : Friedrich Nietzsche. Kindheit und Jugend, Ernst Reinhardt Verl. 1953, S. 161

(11) ebd. S. 192

4. 梅毒と薬

ニーチェの生活と思想との底にあるもの、ニーチェにとって深淵であり悪魔であるもの、それは一種の寄生虫であった。梅毒とはどういう病気なのであるか、当時は医学的にそして社会的にどの様に考えられていたのか、治療法はどんなものだったのか、という様なことについての知識が増せば増すほど、ニーチェの陥った窮地が分ってくる。筆者の知識はまだ浅いけれども、肝腎と思われるものを記しておきたい。

ボールドリー著「細菌とのたたかい」(中谷, 松井訳, みすず書房, 昭和43年)によれば, 「梅毒は, その病原体が固定〔他の菌に対して或る菌が特定の菌であると識別すること〕との訳者注あり〕されるずっと以前に伝染性のものであることが分っていたもう一つの〔らい病及びペストに次いで——筆者注〕病気の見本である。16世紀のはじめには, すでに梅毒については十分識られていて, その診断も容易であり, 性交によってうつされることも分っていたので, 伝播を防ぐために種々の防御手段を講ずることもできた」(4頁以下)。立川昭二著「病気の社会史」(日本放送出版協会, 昭和46年)によれば, 「梅毒がはじめて大流行をみせてしばらくの間というものは, 性交との関連が正確に理解されず, また梅毒のいわゆる第三期症状と初期発疹とが同じ病気であるということもはっきりとつかめなかった。そこに当時の病気にたいする宗教的観念が加わり, このけがらわしい病気は神によって下された天罰であると神学者たちは論じた。梅毒病者は, 聖ディオニュソスと聖ミヌスとを保護聖者とし, 当時その社祠に巡礼することがはやった……性交によって伝染する感染症であることがはっきりとしてきた16世紀半ばになると, この梅毒病者は世人から罪人視されるようになった。そして, その療法として断食・瀉下, それに水銀療法によるはげしい発汗療法は, それにふさわしい罰と考えられた」

(106頁以下)。シゲリスト著「文明と病気」(松藤訳, 岩波新書)によれば, 「ルネッサンス時代は性の問題では非常に寛容であった。娼家は一般に認められ, 誰も自分が感染したことを隠そうとはしなかった……中産階級の勃興とともに事情が根本的に変った。18世紀の間に梅毒にたいし新しい態度が生れ, 19世紀になって有力となった。中産階級は最初から性的放恣を非難し, 家族の神聖を強調した。純潔あるいは少なくとも純潔のみせかけがその成員に要求された……性病にはふつう婚姻外の性交によって罹る。したがってぎせい者は放恣な人間で掟を破った者とみなされた。その者は恥をかき, 家族は甚だしい屈辱を感じた。梅毒と淋病はなみの病気ではなかった。それは声高く言えない恥ずべきものであり, 確かにりっぱな社会ではそうで

あった。遊興後感染したことの分った若い人は自分の病気をかくした。適当な医療を受ける金をもっていないと、自分の父親の助力を求めるよりはやぶ医者^{ヤブイシャ}の所へ行った。……宗教界には性病が罪に対する適当な罰であるという考えが広がっていた。コンドームの使用はすなわち罪を犯した体の部分において罪人を罰するという神の意志を無視するという理由から、1826年教皇レオ12世はそれを禁止した。本世紀の始めにおいてさえエールリヒのサルバルサンの発見によって深く心の平静を乱された教会の人々がいた」(上115頁以下)。

次に梅毒治療の歴史。梅毒流行の最初の頃には「大学出身の医者は、この新しい病気にたいして手を下すことを拒み、この病人を下級の床屋医者や湯屋医者におしつけた。彼らは疥癬にたいする古い療法であった水銀から得た膏薬で首尾よく処置していた。ドイツの人文主義者でルターの協力者であったウルリヒ・フォン・フッテン(1488—1523)は、燻蒸式の水銀療法をうけているあいだの苦痛について身ぶるいするような描写をのこしている……そして多くの者がこの療法中に水銀中毒で死んでいった。一方、より効力のある療法としてはやったのが瘡癤木^{ユソウボク}(聖なるインドの樹)の処方であった。これが大量に新世界から輸入された」(『病気の社会史』107頁)。それから16世紀半ばには、既に引用した様に、「断食・瀉下」が加わり、水銀の丸薬を与えた時代もあった。「梅毒は何世紀をも通じて世界的な問題であった。……この疾患の重大な結果を考慮していつの時代にも沢山の治療薬が工夫されてきたが、いくらかでも真の効果をあらわした唯一のものは、皮膚にすりこまれる水銀であった。しかしこれには限られた価値しかなく、ときにはほとんど病気同等に悪い副作用があることが明らかとなった。エールリヒが最後に、安全でしかも効果のある薬剤を世に提供したとき、この彼の勝利を歓迎する巷の熱狂ぶりは実に想像を超えるものがあった」(ボールドリー、81頁)。この様な次第であるから19世紀後半にはまだ確実な治療法はなかったのである。

さらに梅毒には時代差があり、個人差があり、はっきりした症状が次から次と現われてくる場合でなければ直ったのかどうかも分らなかった。「ガンは昔も今もあるが、古代のエジプト人のガンと20世紀の日本人のガンとでは、その生態がちがう。同じ梅毒スピロヘータといっても、時代によってその性状を異にする」(『病気の社会史』11頁)。初めの頃の梅毒は「今日の梅毒にはみられない兇悪な急性症状を示した」(同書、105頁)。しかし症状は次第に激しさを減じたのであって(『文明と病気』上116頁参照)、最近のわが国の某新聞によれば「症状が皮膚に現われたりする顕性梅毒は少なくなっている半面、自覚症状がないまま進行する早期潜伏性梅毒が増えている」とのことである。この様に梅毒も他の病気と同様に、時代によって性質が異なる。その上に個人差が大きいのである。同じ梅毒菌でもそれが宿る宿主が異なれば菌の作用が異なるのは当然である。「第二期(バラ疹の時期)が決定的に終わってから生涯の間、何も現われずに直ってしまうこともあり、しかし5乃至20年或いはもっと経ってから第3期症状が現われることがしばしばある」⁽¹⁾。ニーチェはバラ疹の時期に駆梅療法を受けたとのことであり(ランゲ＝

アイヒバウム著、栗野訳「ニーチェ」、みすず書房、27頁）、それは水銀を用いたものであったろう。パーゼル時代のニーチェは、医師からの既往症に関する質問に対して、かつての梅毒治療のことを言わなかった様である。（イエーナ入院後のニーチェに対しては水銀塗布が行なわれた時期がある⁽²⁾）。ニーチェは次第に医者に頼ることをやめ、自分で医学、薬学を研究し、自己処方をする様になって行った。ニーチェが自身の体内に注ぎ込んだ薬の種類と量は非常なものであった。それらの薬の副作用を恐れつつも彼は「実験」を続けた。それで「体内の悪魔⁽³⁾」は益々恐るべきものとなった。

ところで、最近の梅毒療法を調べてみたら、サルバルサン剤とペニシリンに蒼鉛剤が併用され、沃度カリと水銀塗布は第3期の特定の症状にのみ用いられるとのことである⁽⁴⁾。ニーチェは蒼鉛剤を使用した。1888年10月14日ガスト宛、「その上、私の健康は一種のショックに勝てません、これは少々長過ぎる一種の赤痢 Dysenterie（ドイツ語では『疝痛 Kolik』）のために起こるのです。私は最初は中毒なのだと思います。けれども普通の薬、蒼鉛とドーヴァー散薬が効果を示してくれました⁽⁵⁾」。ドーヴァー散薬は下痢に対する薬とのことであるが⁽⁶⁾、蒼鉛剤は単なる腸疾患には使わないのではなかろうか。何れにせよニーチェは「普通」でない薬をも色々使ったのであって、彼の室は薬局の如きものだったらしい⁽⁷⁾。序でに余談めいたものになるが、梅毒に関する俗語を調べてみたら、「梅毒治療のための水銀」のことを俗に「鉛」というのである。「体内に水銀を持っている」という言い方もあるが、「五体に（或いは骨の中に）鉛を持っている」というものもある⁽⁸⁾。この言い方は、単に手足が疲れて鉛の様に重いことを表わすのに普通に用いられるけれども、ニーチェの場合には注意を要する。ツァラトストラ第3部の「幻影と謎」においては「重圧の霊」が「鉛を私の耳に、鉛のしずくの思想を私の脳髄にばたばたと注ぎ込む⁽⁹⁾」のである。「重圧の霊」が梅毒または梅毒意識であることは疑いないのであり、「鉛」という言葉を用いた時のニーチェは劇薬を思い浮べていたであろう⁽¹⁰⁾、もしかすると体内の水銀をも。

梅毒とは医学的にどんなものであるのかを若干調べてみた。ニーチェと関係のある必要事項を記したい。感染と発病との問題はすべて宿主と寄生体との間の複雑なからみ合い、すなわち「宿主対寄生体の関係」から理解されるべきであり、その根底にあるものは「寄生現象」 parasitism ということができる（牛場大蔵著「細菌学入門、南山堂、昭和40年改訂第9版、72頁以下参照）。梅毒の経過中にも「種々の複雑な宿主対寄生体の関係が見られるが、第1、2期と第3期では成因的の差のみならず、免疫的にも異なったものが存するであろうとも考えられている……体内に病原体の存する限り、次の感染に対して免疫であり、病気の初期に化学療法によって完全な治療を行なえば、再感染が成立し得る」（同247頁）。だからニーチェが「二回感染」と言ったのは、最初の感染が一たん直ったものと考えていたのであろう。しかしながらもっと重要なのは、ニーチェの思考の中で、感染 Infektion、宿主 Wirt、寄生体 Parasit、寄生虫

Wurm, 寄生 Parasitismus 或いは Schmarotzertum 等の概念が実に活発に働いていることである。

ツァラトゥストラ第3部の「恢復しつつある者」の第1節に verschlafener Wurm というのが出てくる⁽¹¹⁾。この Wurm は何であるかについてさまざまな解釈が現われた。永遠回帰の教えを指すという説が多い様である。しかしこれは虫なのである。はっきりと「寄生虫」なのである。この第1節は、嘔吐を伴う頭痛がやってくる時のニーチェ自身の矛盾した気持を表わしている。Wurm こそは「深淵⁽¹²⁾」であり、「深淵の思想」であり、「怪物⁽¹³⁾」であり、彼の「呼吸をふさぐ⁽¹⁴⁾」者である。そして呼吸をふさぐ者の名が「罪」であることは次章によって知られる⁽¹⁵⁾。「深淵の思想」は嘔吐を催させるのであって、「円環の代弁者」が如何に勇気をふるって立ち向っても敵し難いのである。それにしてもニーチェは彼の内心の悩みの本体を何と多様に、そして分らない様に表現することか。前に引用した「幻影と謎」及び第3部の「重圧の霊」をも併せ読むならば、ニーチェは Wurm の, Parasit の芸術家であった、と言いたくなる⁽¹⁶⁾。

注

(1) G. Klemperer: Grundriß der klinischen Diagnostik, 27. Aufl. Maruzen Company, 1955, S. 31. 異った症例に接していれば、得られるデータが違ってくるから、症状や年数は文献ごとに若干の相違がある。

(2) 「8月17日(1890年)」。水銀塗布中止」(Podach, ebd. S. 126)。

(3) グロイター版V2に載っている二つの遺稿文を並記しておきたい。

15 [50] (1881年秋)。ツァラトゥストラは言った、友らよ、これは新しい教えであると共に苦い薬だ、これは諸君の口には合わないだろう。だから、賢い病人たちがやる様にし給え——これを一気にぐーっと飲み込んだあとで直ぐに、諸君の口の中をまた綺麗にしてくれ諸君の記憶をだましてくれそうな何か甘くて香ばしいものを飲み給え。それでも効めがないことはなかろう、何故なら諸君は今や、私に好意を抱いていない牧師たちが言うであろう言葉を用いれば「体内に悪魔を」持っているのだからね。

16 [11] (1881年12月—1882年1月)。医学に反する処方。——「これらは全く新しい教えであり全く新しい薬だ。これは我々の口に合うものになりそうもない！」と諸君は私に言う。それでは是非、賢い病人たち全部がやっている様にやって見給え——その薬を一気にぐーっと飲み込んで、それからさらに直ぐ、諸君の口の中をまた綺麗にしてくれ、諸君の記憶をだましてくれそうな何か甘くて香ばしいものを飲み給え！それでも「効め」がないことはなかろう——そのことは保証するよ！何故なら諸君は今や、昔の医療巫術者たちの凡てが諸君に言うであろう言葉を用いれば「体内に悪魔を」持っているのだからね。

何れも、体内に悪魔を持っている者のみの書き得る文である。ニーチェの頭の中で梅毒と道徳的な罪とが結び付いていることが、牧師と医者とは置換可能である点にあらわれている。梅毒(罪)を根絶するために注ぎ込んだ薬(永遠回帰の教え)もその副作用の面では矢張り一種の毒であった。序でながらニーチェは1880年夏の遺稿(グロイター版V1, 4 [162])で「わが肉の中には罪が住む」というパウロの言葉を引用している。

(4) vgl. Das große illustrierte Gesundheits Lexikon, C. Bertelsmann Verl. 1962, S. 851

(5) Hanser III, S. 1322

(6) vgl. Meyers Konversationslexikon.

(7) vgl. Nietzsches Briefwechsel mit Overbeck, Nr. 135

(8) vgl. Sex im Volksmund.

(9) KGW VI 1, S. 194

- (10) ニーチェにとって一滴一滴が問題なのであることを示す一例として「曙光」83 番がある。
- (11) KGW VI 1, S. 266
- (12) ebd. S. 267
- (13) ebd. S. 269
- (14) ebd.
- (15) 「アンティクリスト」62 節に「罪という虫 Der Wurm der Sünde」が出てくることによって虫と罪との一体性は明らかである。
- (16) 「人間的」II の「さまざまな意見と箴言」351 番に出てくる Wurm と「人間的」I の 615 番の Parasit とが同じものを指していることは明らかであり、「人間的」I の 617 番をも併せ読めば一層啓発される。序でながら「ワグナーの場合」第 3 節に「宿主 Wirt」が出てくる。KGW VIII 2, 11 (89) にも同様の箇所がある。如何にニーチェが「宿主」の辛さを感じていたかが分る。

5. 初 感 染 前 後

クリスト教信仰の喪失は 19 世紀後半の知識人の一般的風潮であり、プフォルタ校のニーチェは自然にクリスト教から離れて行った。58 年 10 月に入学した当初は「自由」という言葉や「神は善でも悪でもない。人間的概念を超越している」という様な考え方に接して⁽¹⁾とまどいを感じたのではないと思われるが、自由な精神的成長を求める少年が新しい環境の中で家族や故郷を、そして従来の自分の信仰を、宗教一般を、一層広い視野において見る様になるにはさして時間は掛らない。少年ニーチェは反逆児としてクリスト教から離れたのではなく、別離の悲しみを味わいながら自然的成長を遂げて行ったのである。一幕劇「プロメーテウス」の製作、シラーの「群盗」への感激からヘルダーリン、バイロンへの傾倒に到るまでの発展はプフォルタ時代の前半のものである。プフォルタ時代のニーチェの生活と精神的変化とについて詳細に述べているブルンクは、クリスト教が全くニーチェの思考の対象とならなかったことに注目し、「彼の精神の方向はクリスト教によっては規定されなかった」と書いている⁽²⁾。柔軟な少年の魂は健やかに成長したのであり、少年ニーチェが捉われない公平な眼でクリスト教を見ていることは「運命と歴史⁽³⁾」からも、また同じ頃に二人の友（クルークとピンダー）宛に出した手紙の断片⁽⁴⁾からも見て取れる。

ボン時代になってからのニーチェにもクリスト教への敵意という様なものは全くなかった旨をドイセンが述べている⁽⁵⁾。しかし少年から青年への移行期は反逆的な時期であって、ニーチェの自由衝動が実際行動の行き過ぎを生む様になる。プフォルタの第二学級上級の頃にはなまけ者であり、芸術家的不良少年と親しく交わったり⁽⁶⁾、校外で泥酔したため外出禁止をくったりした事のあるニーチェが母親の眼の届かぬボンで学生生活を始めた時には、もはや彼は母親の道徳的説教の彼方であって、学生団体フランコーニアの一員として随分と金使いの荒い生活をし、新生活に伴う喜びと苦しみとを味わった。その間に「全く心理学的好奇心からであったに

せよ⁽⁷⁾」娼婦に接したということはある得よう⁽⁸⁾。

感染がボン時代のことかライブツィヒに移ってからのことかは決定し難いけれど、ライブツィヒでの治療についてのブルクの見解⁽⁹⁾は妥当と思われる。すなわち初感染はボンで、治療はライブツィヒだったろう。当時のニーチェは果敢に認識の道を歩んでいた。65年6月11日ボンから妹宛、「神と世界と贖罪とについての観念を得て全く快適な気分になることがそもそも肝腎のことだろうか。むしろ真の探求者にとっては、自分の探求の結果は正にどうでも良いことではなかろうか。一体、我々是我々の探求の際に、安息、平和、幸福を求めているだろうか。否である、ひたすら真理をだ、それがこの上なく恐ろしい醜いものであってもだ⁽¹⁰⁾」。

7月から8月にかけては、ひどいリューマチ性頭痛。秋にライブツィヒに移り、ショーペンハウアーを知って没頭。「根拠の原理」を読んで記したものと思われる文の最初の部分には、「私の研究のプランはこうである。まず経験的に人間を知ろうと思う、そしてその際に在来の如何なる信仰にも支配されない積りだ⁽¹¹⁾」と記されている。この様に実践的な意欲を持ち続けてはいたけれどもライブツィヒ時代のニーチェは文献学に打ち込んで行った。

68年秋から69年春までの間に書かれたと推定されている自伝的手記の一つに、ボン時代を嘆いている次の様な箇所がある。「六年在学の後に、きびしいけれど有益な教場だったプフォルタ校に別れを告げて私はボンへ行った。ボンで私が気付いて驚いたのは、その様な選帝侯創設学校の生徒が大学に入ってくる時は知育の面では優れているけれども訓育は成っていないということだ。彼は多くの事柄をひとりで考えてきた。そして今や、それらの考えを表現する才能が彼には欠けている。女性たちの教化的影響についてはまだ何も経験していない。書物と慣習とによって彼は人生を知っていると思っている。しかるに今や彼には一切が実に異様にそして不快に思われるのだ。ボンで私はその様な状態だった。それらの不都合を除去するために私が取った手段の凡てがうまく選ばれたものであるとは限らなかった様だ⁽¹²⁾」。彼の除去しようとした不都合の中には女性についての未経験も入っていたと考えて然るべき文である。

同じ頃のものとして推定されている重要な手記があつて、これには編集者によって、「非常に大きな興奮の中で書き付けられたことは疑いない」との後注が付されている。「私が恐怖するのは私の椅子の後にいる恐ろしい姿のものではなくて、その声だ。実際、その言葉ではないのであつて、身の毛のよだつ不明瞭な言い方で発せられる非人間的な音調なのだ。ああ、何とか人間が話す様に話してくれればいいのだが！⁽¹³⁾」。

ブルクはこの手記に強く注目した。「彼が20年後に入り行くことになったあの国からの使者の如くに」ニーチェに話しかけたものをブルクは「デーモン」なりと考え、「彼はこの彼のデーモンをその長い期間決して眼から離さなかった」と述べている⁽¹⁴⁾。このデーモンについての記述は明瞭であるとは言い難く、狂気の予感の如きものを感じさせるだけであるけれども、「彼がそれ〔デーモン——訳者注〕と戦ったのであること、それに打ち勝ち、そしてそれを20

年間抑えつけていたのであることを我々は知っている」という述べ方は彼のデーモン説の並ならぬ深さを示している。ブルンクの後にワルター・ニッグが「何らかの幻覚 Halluzination と同一視するわけには行かない」と述べてブルンクに反対し、「不可視の世界からの合図」であって「形而上学的解明」を要するものとしたけれども⁽¹⁵⁾、彼の試みている「形而上学的解明」はブルンクのデーモン説、或いは幻覚説を引きのばして薄くしただけの饒舌的なものである。

我々はブルンクを一步押し進めなければならない。デーモンという様なあいまいな言葉をやめて、梅毒意識というべきである。これこそ、「悲劇の誕生」の奥底に潜んでいたものであり、後には彼を医学、生理学に駆ったものである。ただし 1873 年に到るまでは、直ったかも知れないという気持、第三期症状には到らずに済むであろうという期待が強かった。生活不可能の恐れを抱かせる身体的変調が生じなかったからである。しかし不安はあった。重大な症状が何時生じてくるか分らなかったからである。梅毒に対する内心の戦いは文献学研究と並行して行なわれていた。それどころか、その戦いがあったからこそ、文献学に、悲劇研究に、さらにワーグナーに打ち込んだのである。彼は死を恐れず、従軍もした。梅毒意識が氷の如きものであったから、ニーチェは火とならざるを得なかったのである。それを特によく示していると思われる二つの作に触れておきたい。一つは有名なものであり、一つは無名に等しい断片である。

注

- (1) vgl. BAW I, S. 48 f.
- (2) vgl. Blunck, ebd. S. 71
- (3) 1862 年春のものである。この論文及び同時期の「意志の自由と運命」に対するブルンクの評価は過大評価であることをここで言うっておかねばならない。これらの論文はニーチェの成長を示している点では興味あるものに違いないが、その思想内容はエマソンの「運命」と殆ど同じであって、ニーチェがエマソン著「処生論」、ミュールベルク訳、ライプツィヒ 1862 年刊、第一章、「運命」から行なった引用文については、BAW II, S. 437 に注がある。「運命」の邦訳は岩波文庫「エマソン論文集」下巻に載っており、ブルンクが彼の著の 81 頁で挙げている「実証主義的な」例もエマソンの方がはるかに豊富である。
- (4) 1862 年 4 月 27 日のもの。KGB I, Bd. 1, S. 201f. これは BAB I には S. 188f. に、そして BAW II, S. 63 にも重ねて載っている。
- (5) vgl. Deussen, ebd. S. 26
- (6) vgl. ebd. S. 5
- (7) Blunck, ebd. S. 110. メービウスも大体同じで、「知識欲から」と考えている。vgl. Möbius, ebd. S. 50
- (8) 当時の学生生活及びフランコーニア会員ニーチェについて Scheuer : Friedrich Nietzsche als Student (1923) が詳しく述べている。
- (9) vgl. Blunck, ebd. S. 161
- (10) KGB I, Bd. 1, S. 60
- (11) BAW III, S. 131
- (12) BAW V, S. 254
- (13) ebd. S. 205. ブルンクはこれをシュテファン・ツヴァイクの収集品としているが (vgl. Blunck, S. 218), シュレヒタによれば間違いである。vgl. Hanser III, S. 1361
- (14) Blunck, S. 218f.
- (15) W. Nigg : Prophetische Denker, Artemis-Verlag, Zürich, 1957, S. 439

6. 「悲劇の誕生」と戯曲「エンペードクレス」計画

「悲劇の誕生」は恐ろしい作品である。特に第20節の末尾におけるディオニュソス熱狂の言葉は「死と悪魔をつれた騎士」からでなければ発せられることはあるまいと思われる。「そうだ、わが友らよ、ディオニュソスの生を、そして悲劇の再生を私と共に信ぜよ。ソクラテスの人間の時代は去ったのだ。きずたで頭を飾れ、そしてテュルソス⁽¹⁾を手にとれ、そして虎や豹があまえながら君らの膝元に横たわってもいぶかるなかれ。今や、敢然として悲劇の人間であれ。君らは救済されねばならないからだ。君らはインドからギリシャへのディオニュソス祭行列について行かねばならない！激しい戦闘のための用意をせよ、しかし君らの神の奇跡を信ぜよ！⁽²⁾」。これは、奇跡が生じなければ勝ち目のない戦闘を覚悟している者のみの発し得る言葉ではなからうか。1886年にこの書に付け加えた「自己批判の試み」の第4節でニーチェは「心理学的な」質問、「生理学的な」質問、さらには「精神病医のための」質問をも提出している。

「生理学的な」質問はこういう質問である、「悲劇的及び喜劇的芸術がそこから芽生えた狂気、ディオニュソスの狂気は如何なる意味を持っているのか？⁽³⁾」。ニーチェは、彼自身に関しては、はっきりした生理学的な答を持っていたのであり、それを狂気 *Wahnsinn* という別の名前で呼んでいるに過ぎない。「ツァラトゥストラ如是説」の序説に、「諸君が接種されねばならぬ狂気」と書かれているあの狂気がニーチェには「悲劇の誕生」以前に既に「接種」されていたのである。オットー・リベック（キール大学の文献学教授で、ローデを招いた人。1872年秋からはハイデルベルク）がW・ディルタイ宛に書いた批評は好意的なものであるけれども、それでも、「少々の愛らしい狂気と発酵中のぶどう汁[青春の意——訳者注]」という言葉が見られる⁽⁴⁾。有名な作品「悲劇の誕生」についてはこれで止めて、それと大体時を同じくしてニーチェの頭の中にあった戯曲「エンペードクレス」の草案⁽⁵⁾について述べたい。注目されることが少ないものであるけれど、青年ニーチェの「狂気」と覚悟がなまの形で現われている草案なのである。

戯曲「エンペードクレス」の第一稿は70年秋から71年にかけての間のものと推定されている。70年夏に「ディオニュソスの世界観」を書いたニーチェは看護人として独仏戦争に従軍し、病気になってナウムブルクで静養してから10月下旬にバーゼルへ戻ったのであるが、既にナウムブルクで彼は「悲劇と自由精神」（副題は「音楽劇の倫理的・政治的意味についての諸考察」）のため色々な考えを記し始めていた。この論文のモットー（9月22日に書かれた）は次の如くである、「悲劇の母体を見付け出すためには、考察の深淵を恐れてはならない。母体は即ち、意志 *Wille*, 狂想 *Wahn*, 苦痛 *Weh* である⁽⁶⁾」。これに続いて載っている諸考察は「悲劇の誕生」の思想圏に属する極めて興味深いものであり、その中にエンペードクレスが現われてくる。「エンペードクレスは純粋な悲劇の人間である。彼がエートナにとび込んだのは——知識衝動からだ！彼は芸術にあこがれ、そして知識のみを見出した。しかし知識はファウストを作る⁽⁷⁾」。「何

回でもエートナにとび込もう⁽⁸⁾」という凄まじい言葉で始まっている文も見られる。戯曲「エンペードクレス」の第一稿は、編集者の後記によれば、これらの諸考察と同じノートの中にある⁽⁹⁾。

ヘルダーリンの「エンペードクレス」に対する少年ニーチェの感激は、友人への手紙の形式で書いて提出した作文⁽¹⁰⁾にはっきり現われているけれど、ニーチェが今考えているのは、その改作という様なものではない。彼が描こうとしているのは彼自身をである、その本性は実にヘルダーリンと似たものではあったにしても。

第一稿には三つの案が含まれている。第一案の末尾はこうである、「彼は民衆が不治であることを認識したので、民衆の絶滅を決心する⁽¹¹⁾」。この考えはニーチェのエンペードクレスに常に付きまといっている考えである。第二案は、ほんの断片である。第三案で初めて三幕の体裁を整えるに到るのであるが、最も注目すべきはその中の第二幕である。「恐ろしい悪疫⁽¹²⁾」が現われてくる。この「悪疫」に対してエンペードクレスは「ディオニュソスのバックス祭」を催す。そこへ婦人が登場する。この婦人は即ち「自然」なのであって、正体を現わした「自然」を見てエンペードクレスはぞっとするのである。「悪疫」とは、「自然」とは、何であろうか。

それを解くために、第一稿の少し後に書かれたと推定されている第二稿（四つの案を含んでいる）の第一案と第二案とを一緒にして肝腎な点を挙げる。悪疫は恐怖と同情とによって伝染する種類のものである（第一案）。エンペードクレスは恐怖と同情から免れているのであるが、それも、女主人公（悪疫の対症薬として催される悲劇の）の行為が行なわれないうちのことである（第二案）。この「女主人公の行為」が何を指しているかと言え、それは、「脇役が死ぬ時に彼女がその男のところへ駆け寄ろうとする」ことである。エンペードクレスはその時に彼女を引きとめる。これがエンペードクレスの同情である。そしてこの同情は恐怖の原因となる。何故なら、「彼女は彼に対して心を燃やす」ことになり、彼は「自然を見て戦慄する」ことになるのだから。

さて、考えてみるに、「悪疫」は同情と恐怖（何れも弱さを示すものとしてニーチェにより排斥された）によって伝染する感染症である。エンペードクレスは女性によって同情と恐怖に捉えられるのである。女性の正体である「自然」とは、即ち Wurm ではなかろうか。「悪疫」は言わずもがな。

この「悪疫」の伝染に対する「対症薬 Gegenmittel」がディオニュソスのバックス祭であり、悲劇である。ニーチェという人は恐ろしい人である。彼によれば、ディオニュソス劇はギリシャ人にとっては「彼らの宗教の最も真剣な行事⁽¹³⁾」であったのであるが、彼がここで持ち出しているものは全く古代的でない。エンペードクレスは宗教と芸術との欺瞞性を認識した後に、「宗教と芸術とを利用する暴君となり、益々冷酷になって」いるのであり（第一稿第一案）、その彼が催す祭は当然、底意に満ちたものであることになる。エンペードクレスの同情心が絶滅欲と結び付いていることは第二稿第二案によって分るのであり、それほどに彼の厭世的認識は強い

のである。

第二稿第四案は五幕の構想であるが、これの第五幕に到ってエンペードクレスは「贖罪の死による再生を期待する」。この第四案が最終的構想であって、第三稿(71年初めのもの)においてはこの案の第一幕冒頭の場面を書き始めているのであるから、その最後の幕においてエンペードクレスが自身を「無限の罰に価すると感じている」ことは重要なことである。「贖罪の歌⁽¹⁴⁾」からの着想であろうが、ニーチェ自身の脳中にしばしば去来し、彼が抵抗し続けていた想念であったことも確かであろう。他人に言えない悩みの重圧の下にあったが故に彼は単なる文献学者ではあり得なかったのである。彼がディオニュソス崇拝をあれほど力をこめて叫んだのも自身の病気を意識していたからに他ならない。「人間的」Iの214番の後半は次の如くである、「……たとえば、ギリシャ人は初期の数世紀の間、神経性疫病(てんかん、舞踏病の類)の大流行に悩み、そこからバックスの巫女という素晴らしいタイプを作り出したのだ。——即ち、ギリシャ人は決して頑丈な健康を持てはいなかったのだ、——彼等の秘密は、病気をも、それが力を持っておりさえすれば、神として崇拝するということであった」。

注

- (1) ディオニュソスとその信徒が持っていた葦の霊杖。
- (2) KGW III 1, S. 128
- (3) ebd. S. 10
- (4) vgl. Möbius, ebd. S. 89
- (5) 「悲劇の誕生」は実にゆっくりと成立した作品なのであって、戯曲「エンペードクレス」はそれの準備期の一つの試みである。vgl. Bernoulli I, S. 162ff. なお、この時期の遺稿ノートがまだグロイター版で刊行されていないためGOA第9巻に依った。
- (6) GOA IX, S. 100
- (7) ebd. S. 123
- (8) ebd. S. 128
- (9) ebd. S. 469f.
- (10) BAW II, S. 1ff. 1961年10月19日のもの。17歳になったばかりの少年の若さが持つ傲りはあるが、悲劇に対する豊かな感受性を示している。
- (11) GOA IX, S. 130
- (12) Furchtbare Pest. このPestは、鼠によって伝染する特定の病気「黒死病」を意味しているのではない。ドイツ語のPestは悪疫一般を指す場合が多いのであって、「人間的」IIの「さまざまな意見と箴言」304番のPestも「悪疫」の意味である。「ディオゲネス・ラエルティウス」(アペルト訳)第2巻123頁では「ある疫病 eine Seuche」であり、実体も「黒死病」ではなさそうである。
- (13) GOA IX, S. 118
- (14) vgl. Diogenes Laertius II, übersetzt und erläutert von Otto Apelt, Leipzig 1921, S. 126 u. Diels I, S. 264ff.

7. 1873 年の眼痛

ニーチェの生涯において最も重要な年は 1873 年である。この年からニーチェは地獄の苦しみに入ったのであり、ディオニュソスのニーチェ、道徳を無視する態度を取っていたニーチェは道徳との闘争に向きを変え始めたのである。この変化は同年春に始まった眼病と密接に関係していたのであって、この眼病こそは問題である。筆者の調べたところではニーチェが「眼の痛み」を訴えたのはこの時が初めてなのである。今までにこのことを指摘した文献が見当らないから、これはニーチェの伝記にとって重要な発言であると思うので、少しばかり些事に亘らざるを得ない。

ニーチェはこの年、復活祭休みを利用して 4 月 5 日にバーゼルを出て翌日バイロイト着⁽¹⁾、キールからのローデもやってきて一緒に滞在。12 日に二人はバイロイトを辞してその晩はリヒテンフェルスで泊る。翌朝、十四聖者寺院へ散歩の後に飲んで別れ、ニーチェはバンベルク経由でニュルンベルクへ行き⁽²⁾、その日の午後と翌 14 日一杯とをそこで過ごしてから夜行でリンダウへ向い、十五日夜にバーゼルに到着した。そしてバーゼル帰着後に家族宛に書いた最初の手紙(29 日)で、頭の不調と時折の眼痛を訴えているのであり、これが、確かな証拠を持つ初めての眼痛なのである。

ニーチェは生来、眼が悪かったことは確かである。弱視であり強度の近視であった。そして頭痛持ちでもあった。しかし痛みを伴う眼病はなかったのである。ニーチェの生来の頭痛を眼のせいであるということにしたばかりでなく、眼痛もあったことにしてしまったのはニーチェの妹なのである。眼痛に関して妹が行なったニーチェ手記偽造は証拠が既にあがっていることであるが、まだ気付いていない研究者が多い様であるからこれについて先ず述べることにしたい。

1858 年夏に書かれた自伝「わが生涯より」の終りに近いところにこういう文がある、「その様な幾多の決心をし、死と墮落という小説を書こうとさえしたほどであったのは、私が第四学級の後学期に頭痛のため通学を許されなかった時のことである⁽³⁾」。ところが妹は彼女の著「ニーチェ伝」第一巻(1895 年刊)において「わが生涯より」から長い引用を行なった際に、「第四学級の後学期に頭痛のため」を「この前の夏に眼痛のため」と変えた⁽⁴⁾。「この前の夏に」と変えたのは、ニーチェの休学をあいまいにするためであろう⁽⁵⁾。しかしそれよりも重要なのは、「眼痛のため」と変えたことである。原文を変えるということは、余程の下心がなければやらないことである。ニーチェ自身によってもプフォルタの医師の診断⁽⁶⁾によっても眼痛ではなかったのに、妹は、プフォルタ時代の頭痛を全体的に「眼と頭の痛み」ということにした⁽⁷⁾。

「ニーチェ伝」第二巻第一部(1897 年刊)ではプフォルタ時代の頭痛の原因として「眼の過労が挙げられた⁽⁸⁾」と書かれていて、眼痛をひっこめているけれど、眼の過労を誰が挙げたのか

は書かれていない。12才の時にイエーナの眼科医に診て貰ったことが述べられていて、これが頭痛もしくは眼痛と関係があったかの如く感じられる様に書かれているが、第二部(1904年刊)における一層詳しい記述⁽⁹⁾を読むと、眼痛のためであったわけではなさそうであり、また、片眼の弱視が確かめられたただけであった。なお、第二部においては、プフォルタ時代の頭痛は完全に眼痛とすりかえられた。「二回彼は眼の過労と激しい痛みに悩んだ。母はそのとき彼を家に引き取り、彼はまもなく回復した⁽¹⁰⁾」。

ニーチェの病気の梅毒起原を主張したメービウスは、73年の眼痛から始まった一連の症状に非常な注意を払った。「1873年に新しい事態が生じた」と彼は書いており、当時ニーチェが「脈絡膜炎」を患ったのであることをも記している⁽¹¹⁾。しかし妹の記述をも資料としたために徹底性を欠くことになった⁽¹²⁾。それでもメービウスの書は妹に衝撃を与えた⁽¹³⁾。「若きニーチェ」(1912年刊)において妹は先に挙げた偽造箇所を含む引用を取り除いて、自身の文章に替えた。「悲しいかな1856年から57年にかけての疲労の冬の結果、初めて兄に眼痛が現われた、そしてこれは最初頭痛と見なされた……夏休みを二、三週間のぼした⁽¹⁴⁾」。そしてさらに、プフォルタの校医ツィンメルマンの診断に対する駁論を彼女特有の悪意的なやり方で述べた⁽¹⁵⁾。

「わが生涯より」はその原文が「歴史的批判的全集」の作品篇第1巻(1934年刊)において公表された。ブルンクはその著の48頁に前掲引用箇所の正しい文を引いている。しかしブルンクは「ニーチェ伝」第1巻における妹の偽造には言及していない。彼は気付いていないのである。だから、その後の妹の記述を信用してしまうことになり、ドーム・ギムナーズィウム時代のニーチェが既に「頭痛と眼痛」を患っていたに違いないと考えてしまったのである。そしてブルンクの考えは今日まで反駁を加えられていない。即ち、妹が眼痛に関して作り出した物語は今もなお生きていて、ニーチェの幼少年時代の健康状態に関してはまだ全面的に解明されてはいないのである。

さて、妹は前述の如き綿密な様でいて統一の取れないやり方で73年の病気を持病の再発の類にしてしまい、ニーチェの病気の実相を世に知らせまいとしたのであったが、73年4月下旬に始まったのは、はっきりと「眼痛」なのである。読み書きが不可能となった。書こうとした時にはひどい痛みに襲われて眼科医のところへとんで行ったことが6月26日のゲルスドルフからローデ宛の手紙で分る⁽¹⁶⁾。「突然の痛む弱視に大変悩んでいます」という言葉のある5月20日のワーグナー宛の手紙を書いて以後は、9月21日にクルークと母とへ書くまで、バーゼル滞在中の妹への簡単な連絡が二回あるだけである⁽¹⁷⁾。

それでもニーチェは勤務を続けた。胃も不調であったが彼は我慢強かった。病状は一進一退。そして75年4月11日に到って嘔吐を伴う頭痛の発作⁽¹⁸⁾。この時からの頭痛が眼痛と関係を持っていたことは多くの証拠から明らかである。

73年が梅毒第3期の始まりであったことは疑いないであろう⁽¹⁹⁾。ところでニーチェはそれ

を感じたかどうか。「遂に来了」と彼が感じたことは確かであると筆者は思う。彼の精神的変化がそれを示している。早くから否定し去っていたクリスト教を彼は問題にし始めたのである。無論、彼は従来の軌道を押し進もうと努めたのだけれども、病気の痛みが精神的悩みを惹き起こしたのであり、その悩みの最も大きな部分を占めていたものがクリスト教的な罪と罰の問題だったのである。理念的には彼が既に越えていたこの問題が、行為の重大な結果を体験するに到って初めて、彼の良心と頭とに襲いかかったのである。

注

- (1) vgl. BAB III, S. 501, Anm. 722. 序でながら、この注を付した編者が Nr. 723 (4月5日バーゼルからマイゼンブーク嬢宛のニーチェ書簡) の日付を4月6日と推定し、Nr. 722 (ゲルスドルフ宛) を4月5日と推定しているのは、理由が分らない。ローデとの往復書簡 (GB, Bd. 2, 2. Aufl., 1902) 405頁の脚注によって混乱させられたためであろうか。
- (2) この「ニュルンベルク行き」は問題である。ブランは彼の書の208頁にこんなことを書いている、「ペーター・ガストから発している或る報告によればニーチェはニュルンベルク通過の際に感染したとのことである。その地で第2回目の性交が行なわれたということは可能性のないことではない。ニーチェは最初の性交の約十年後、パイロイト祝祭劇への途次に、ニュルンベルクで下車したらしいのである」。ブランはこの「或る報告」を彼自身のニーチェ性交二回説と結びつけて、第二回目の性交は76年夏のパイロイト祝祭劇出席の時に行われた可能性ありと考えているのであるが、これは無理である。その時のニーチェの健康は非常に悪く(7月21日と推定されるゲルスドルフ宛書簡参照。BAB IV, S. 293f.), ハイデルベルクで一泊せざるを得なかった(7月25日と推定される妹宛書簡参照。ebd. S. 294f.). ニーチェのニュルンベルク行きは61年夏(vgl. BAB I, S. 379u. BAW I, S. 255ff.), 67年8月(ローデと一緒のバイエルン旅行の時。vgl. BAW III, S. 280u. 423), 70年8月22日(モースエンゲルと。vgl. BAB III, S. 420) にも行なわれたが、61年は問題にならないし、他の人と一緒にあった67年及び70年の場合も、ニーチェの性質を考慮すれば矢張り可能性はない。従ってガストの言が本当であるとすれば、それがあてはまるのは73年4月の場合のみである。そしてこの場合は大いに可能性がある。この時のニーチェの健康状態は良好であった。リヒテンフェルスでの別れ酒で世界が回るほどに酔っばらって車中では眠り込み、バンベルクで目を覚ましてコーヒーを飲んでから人心地が付いた。そしてニュルンベルクで一日半を過ごしたのであるが、その時のニーチェは「実に実に憂鬱」な気分であった(5月5日ローデ宛書簡参照。BAB IV, S. 3f.). その憂鬱さにはパイロイト滞在の不首尾(4月18日ワグナー宛書簡参照。BAB III, S. 374) が関係していたであろうが、さらにニュルンベルクに着いてから不愉快な目に会った可能性もある。ニーチェのニュルンベルク行きはバーゼル出発前から決っていたことであって、出発直前に彼はハイデルベルク滞在中のローデとパイロイトとニュルンベルクとへ電報を打っている(vgl. BAB III, S. 367. ゲルスドルフ宛のもの)。ところがニュルンベルクで何の用事があったのかは分らないのである。ゲルスドルフとローデとは知っていたに違いないのであるが、この頃に関する資料は紛失あるいは未発表のものが多くのである。シュレヒタはハンゼル版第3巻の年譜の1873年の項に「復活祭にひとりでニュルンベルク」と記しているのみである(1365頁)。

ところでニーチェが悲しい時には性欲が昂進したらしいことが遺稿(76年末—77年夏)から推定される。即ち「悲哀と感覚的快樂—人間が悲哀状態の時には感覚的樂しみの類に盲目的に身を委ねがちなのは何故だろう。それらの樂しみの中にある麻痺的要素を彼は求めているのだろうか? それとも、どう仕様もない感情の要求なのだろうか?—サンチョ・パンザは『人間は余りにも悲哀に身を委ね過ぎると動物になる』と言っている」(KGW IV 2, 23 [189]). 表題中の「感覚的快樂 *Sinnenlust*」は「肉欲」と訳して差支えないと思われる内容である。ニュルンベルクで憂鬱であったニーチェは13日の夜をどこでどう過したのであろうか。

さらにもう一つ考えねばならないことがある。ニーチェはニュルンベルクへ女性と会いに行ったのかも知

れないのである。ニールゼン夫人（オーヴェルベックによればホルシュタイン出身であるからネルセンが本当かも知れない。vgl. Bernoulli I, S. 269）が73年6月17日にニーチェに宛てた手紙（ニーチェの妹の死後に発見された。vgl. BAB IV, S. 358）から考えると、ニーチェが同夫人にディオニュソスの頭部の写真を与えたのは大体この時期に当たっている。ニーチェと同夫人との関係は、ニーチェの妹によって不明なものにされてしまっており、今後の発掘が期待される。ニーチェ崇拝者であった同夫人は実に奇怪な女性なのである。しかもディオニュソス信者であったらしいのである。

- (3) BAW I, S. 30
- (4) Elisabeth Förster = Nietzsche : Das Leben Friedrich Nietzsches, Bd. 1, Leipzig 1895, S. 30
- (5) ニーチェの幼少年時代の健康について詳しく書くことは避けるが、彼はドーム・ギムナージウムの第5学級に一年半、第4学級に二年を要している（入学前も病気だった）。第4学級に進んだのは56年春であり、夏学期は登校し、後期（冬学期）に入ってから休学したのである（12月まで登校していた）。そしてこの休学は57年夏学期の終りの頃まで続いた筈なのである。しかるにブルンクは「第4学級後期」を「56年夏」と考えているし（vgl. Blunck, ebd. S. 48）、シュレヒタも同様に「56年夏、頭痛と眼痛のために休暇をとる」（Hanser III, S. 1359）としている。休学に関してはニーチェ自身もあいまいな書き方をしている場合が多いから注意を要するのであって、筆者は年数を割り出すのに可成り苦勞をした。
- (6) vgl. BAB I, S. 340 f.
- (7) vgl. E. Förster = Nietzsche, ebd. S. 166f.
- (8) E. Förster = Nietzsche, Bd. II, Abt. 1, Leipzig 1897, S. 41
- (9) vgl. ebd. Abt. 2, Leipzig 1904, S. 900
- (10) ebd.
- (11) vgl. Möbius, ebd. S. 71. 1877年10月初めのクリューガー（眼科医）とアイザーとによる診察の結果がKGW IV 4, S. 34に載っている。それによれば「検眼鏡は両方の眼の中に中心性脈絡網膜炎の産出物を示している」。メービウスはシース教授の診察については知っていたが、この検眼鏡鑑定のことを知らなかった。
- (12) vgl. ebd. S. 67
- (13) vgl. E. Förster = Nietzsche, Bd. II, Abt. 1, S. 898f.
- (14) E. Förster = Nietzsche : Der junge Nietzsche, S. 68f.
- (15) vgl. ebd. S. 87
- (16) vgl. Die Briefe des Freiherrn C. von Gersdorff an Friedrich Nietzsche IV. Teil (Ergänzungsband), 1937, S. 14
- (17) 何れもフリムスから。7月末と8月初めのもの。前者には「私はまだ書けない」と書かれている。vgl. BAB IV, S. 8
- (18) vgl. ebd. S. 167
- (19) 第三期（脳梅毒）は感染後三年以上、長ければ十数年、大体は数年後であるらしい。症状はさまざまで、「精神科学新書」（金芳堂、改訂第3版、昭和46年）は、三つのタイプに分けており、その一つの「髄膜炎型」は、頭痛〔夜間ことに激しくなる〕、嘔吐、眩暈、視神経炎、眼筋麻痺がとくに多くみられる、とのことである。ニーチェにはこれらの症状が次々と生じた。後には「血管型」の症状である運動麻痺、失語、失行も現われた。「家庭の医学」（小学館、改訂10刷、昭和47年）によれば、第三期は、「頭が重い、めまい、不眠、忘れっぽい、短気などがあり、手足の片側のまひ、失語症、顔面のまひ、半身知覚異常などの症状が現われる」。「脳を包んでいる脳膜や脳の血管が梅毒スピロヘータに侵された病気」であるから、「脳が冒された『進行まひ』とは違って、病覚がある程度保たれていることが多い」。

8. 精神的悩み

この時期の遺稿及び書簡がまだグロイター社から刊行されていないので従来の資料によるのは残念であるが、グロイター版もニーチェ書簡に関しては1869年までの既刊分が歴史的批判的全集と殆ど同じであるから後者に含まれている77年5月までのニーチェ書簡は信頼可能と思われる。それで主としてこれを頼りに、ニーチェの中に生じてきた精神的变化を照らし出そうと思う。

ニーチェは眼痛に悩まされながらも調子の良い時には仕事を続けた。73年夏には「反時代的」第一篇、「道徳外の意味における真理と虚構について」を何れもゲルスドルフに口授して筆記して貰い、秋から冬にかけては講義のかたわら「反時代的」第二篇を作り出した。9月27日ゲルスドルフ宛、「僕は何かを生み出す時にのみ本当に健康なのであり、自分を好調と感ずる。その他の一切は悪い幕合音楽だ」。まさに仕事の鬼である。しかし年末をひどい状態で過ごしてからは一層の摂生生活に入り眼の保護にも一層努める。書簡の中には病人の悩みが時折示される。74年3月26日、家族宛、「非常な用心と規則正しさのおかげで大いに好調です。……私は実際悩みが多過ぎます、そして身体が病気なら嬉しいと言える位です。何故なら、その時には自分が助かるかも知れないと考えたりすることが出来ますからね。……私は呪いを出版することによって自身を吐き出すのです、そして今また第三反時代的に取りかかろうとしています」。4月4日、マイゼンブーク嬢宛、「御存知の様に、時折恩恵の如く思われる肉体的悩みの状態があります。何故ならその悩みによって、平生の悩みを忘れるからです、あるいはむしろ、身体が助かる様に自分も助かるかも知れないと考えるからです。これが私の病氣哲学です、この哲学が魂に望みを与えてくれます。まだ望みを持っているなんて、芸当ではないでしょうか?」。5月14日頃、ローデ宛、「僕は時折恐ろしい嘆きに陥る、そして如何に快活に振舞っていても常に自分の存在の深い憂鬱を意識している。しかし何一つとして変る筈がないから、僕は愉快になろうとし、自分のみじめさを一般化しようとし、そして個人的になることを断じて避けている」。彼は「著作することで憂鬱を除去しよう」とし(6月1日、ローデ宛)、「馬車馬の如く」(12月3日、家族宛)進まねばならないと思っているが、「第四反時代的」にしようと考えていた「われら文献学者」は遂に停頓してしまう。従来の軌道を前進することが出来なくなるのである。口外出来ない病気の毒が彼の身体に与えた痛みが彼に益々道徳的圧迫を加えたために、ディオニュソス的前進を続けてきたニーチェも遂に停止せざるを得なくなったのである。

当時のニーチェの遺稿を見ても、彼が当時公けにした「反時代的」諸篇とは異なった風景が眼前に現われてくる。先ず73年夏の論文の題名が既に道徳意識をはっきり打ち出している。しかも、「真理」と「虚構」とを対置せしめていることは、真理とされているものに対する断固たる態度を示している。この論文はニーチェにとっては、彼の精神的变化の記念碑の様なものだっ

たのであって、彼は後年にこう記している、「道徳的な事柄について考えてみれば、私は長い沈黙を宣告されてきた。私の諸著はあれこれの暗示を含んでいる。私自身はもっと勇敢にそれらの事柄を考えた。二十五歳の時に既に私は自分のために『道徳外の意味における真理と虚構』という覚え書を草した⁽¹⁾」。同年秋の遺稿⁽²⁾は道徳、特にキリスト教道徳に対する抵抗意識の感じられる箇所を数多く含んでいる。73年、74年の遺稿がグロイター社から刊行される日の早からんことを願わざるを得ない。

74年4月1日、ゲルスドルフ宛の手紙の「僕は若干の自由以外の何物をも求めない⁽³⁾」という言葉に始まる悲痛な自由渴望の叫びも、主としてニーチェの道徳的窮境を示すものと解さるべきものである。マイゼンブーク嬢は、道徳的戦い、良心の葛藤を経てキリスト教を脱却して行った女性として自伝「一理想主義女性の手記⁽⁴⁾」を書いた人であり、ニーチェは終生この人を敬愛したのであったが、彼女の書を読む前後のニーチェ書簡を引用する。これらによって、ニーチェの求める自由が何であるかが納得される。75年8月11日、「私たちの様な者は、つまり貴女と私とは、純粋に肉体的に悩むのでは決してないのでして、一切に精神的危機が深く混り込んでいるのです、それですから私は、自分が薬局と台所のおかげだけで再び健康になり得るなどとは全く考えられません⁽⁵⁾」。76年4月14日、「二週ほど前の日曜日に私はひとりでジュネーヴ湖畔に、そして朝から月の輝く晩まで全く貴女の傍に、過ごしました。つまり私は回復した感官をもって貴女の書を読んだのです。……私は今は一層健康で自由です、そして果さねばならない課題が、また私の眼前にあります。私を苦しめることなしにです。貴女が私の傍にいて下さったらと願うことが何としばしばあったことでしょう、私よりも高い道徳性と本質を持っている人でなければ答えることの出来ない或る事柄をお尋ねするためにです⁽⁶⁾」。

マイゼンブーク嬢の書によって彼が健康感、自由感を回復したことは、同じ頃に友人たちへ出した手紙にも現われており、4月15日、ゲルスドルフ宛の手紙にはこう書かれている、「僕は自分が今まで自分の解放のために出来るだけのことをやってきたのでありそれによって他の人たちにも真の貢献をしてきたのだという『晴れやかな良心』を再び見出した。この軌道を僕は再び前進する、そして絶望的に後を見たり前を見たりすることはもうやらない。僕たちの素晴らしい女友達マイゼンブークの書に僕は非常に感謝しており、彼女と道徳的な最高のよしみを結びつつ朝から夜おそくまで野外に過ごした日曜日を忘れないだろう⁽⁷⁾」。この手紙はニーチェが『やましき良心』の攻撃をはね返していることを示している。しかし解放感は一時的なのであって⁽⁸⁾、体内の虫の故に彼はどうしてもキリスト教道徳を考えざるを得なかった。敵は二重であり、巨大であった。重圧のために彼は暗くなり、地下的になって行った。ディオニュソスはアンティクリスト⁽⁹⁾に変わって行った。

75年以後の遺稿ノートは既に刊行されていて、道徳的罪に対する戦いを始めたニーチェの地下的な作業が明らかとなっている。グロイター版Ⅳ 1（75年春——夏）5〔1〕（結果によっ

て測るべからず、との主張), 5 [126] (ギリシャ人は後悔しなかった), 5 [163] (魂の痛み
の救済策) 等を読み進めば、バイロイト祝祭劇以前のニーチェの思考の進み具合が分る。色々
と紹介したいのであるが、ここには祝祭劇のあとのⅣ 2 (76 年終——77 年夏) の「精神的解
放にとっての良心の苛責の価値」の冒頭部を挙げるにとどめたい。「世の中の精神的自由を増大
させるために良心の苛責が本質的に貢献したことは疑いない」。

注

- (1) KGW VII 2, 26 [372]。84 年夏から秋にかけての間のもの。
- (2) 不完全な編集ではあるが、大オクターフ版第 10 巻 285 頁以下に「窮地に立つ哲学のための諸思想」として
載せられている。
- (3) BAB IV, S. 63
- (4) フランス語版は 1869 年に匿名で、ドイツ語版は第 1, 2 巻が 75 年秋に、第 3 巻が 76 年 2 月に出た。
- (5) ebd. S. 227
- (6) ebd. S. 266
- (7) ebd. S. 269
- (8) 76 年 4 月 5 日にシヨン付近からパーゼルの同宿の友オーヴェルベックに宛てた手紙は身体の悩みと道徳
の悩みとの関連を示していて非常に重要なものである(「ノルデン」第 9 号所載拙論の注 45 を参照されたい)。
ニーチェの精神的悩みは基督教道徳的悩みではなかったけれど、道徳外的、非道徳的、反道徳的、超道
徳的悩みではあった。良心問題は彼にとっては大問題だったのである。
- (9) 世の末日の前に現われて誘惑する一種の悪魔。ヨハネ第 1 書 2 章 18 節, 22 節。第 2 書 7 節。なおマタイ 24 章
5 節以下をも参照。

9. 梅毒意識と道徳

73 年以後のニーチェの精神的変化に筆者は以前から可成りに注意を払ってきたのであった
が⁽¹⁾、変化の原因がどうもはっきりしなかった。病気と道徳とが筆者の中でうまく結び付かなか
ったのである。しかし梅毒という観点はこの点を完全に解決するものであった。梅毒は道徳
的病気だったからである。今日でもそうでないとは言えないのであるが、19 世紀の基督教
世界では、神の祝福を受けた正式の結婚によるものでない性交の結果である梅毒は、罪に対し
て下された罰であると一般に考えられていた。梅毒患者は肉体的苦痛に苦しみつつ不浄性交に
対する道徳的非難の眼にも堪えねばならなかった。梅毒は出来る限り隠さねばならない恥ずか
しい病気であった。既に触れたこれらの社会的事実が筆者にニーチェの変化を解明する鍵を与
えてくれたのだった。

梅毒第一期、第二期の症状は大したことはないのであって、痛むことなく、直ぐ消えてしま
う。けれども、梅毒スピロヘータがまだ発見されていなかった当時は、直ったのかどうか分ら
ないという不安が残った。不安は恐ろしい。それでも恐怖に陥って身動きも出来ずに時を過ご

しているわけには行かないから、やけにならない人は仕事に没頭しようとする。それでもうまく行かないのが普通であろう。「反時代的」までのニーチェは違っていた。この時期までのニーチェだけでも驚嘆に価する。しかし、真に恐るべきものとは決して言えない。彼が真に恐るべきものとなって行くのは、恐怖と顔をつき合わせて生きなければならなくなり、絶望と戦い続けなければならなくなっているからである。

梅毒第三期の苦痛の下における恐怖、絶望感、それまでの想像上の不安、恐怖とは異なるであろう。痛みは激烈であり、病気は確実に進行するのであり、一時的に直った様に見えても直ぐ再発するのである。そしてこの病気を完全に直す薬がまだないことは分っていたのである。局部的治療をしながら、ひとりでは堪える以外には致し方ない病気だったのである。そして堪えることが止む時は廃人なのである。しかも、当然それ以前に、生活不能に陥る時がやってくるのである。

ニーチェは73年春の眼痛の時には第三期の到来を疑わなかったであろう。しかし調子が良くなれば希望を取り戻したであろう。摂生生活による体力の増大もしくは薬の効果によって寄生虫が退散したかも知れない、もしかすると第三期症状ではないのかも、という様な期待が時折生じたことは確かである。何しろ、百パーセントの確実性を持つ診断を下すことは如何なる医者でも不可能な種類の病気だったのである。分らない病気との闘争をニーチェは続けたのである⁽²⁾。

今日でもニーチェの病気に関してはさまざまな説がある。1889年1月3日の発狂に関しても勿論一致していない。ポードッハの書(1930年刊)は当時までのさまざまな説を紹介してから「決定不可能」という結論に落ち着いた⁽³⁾。筆者の見解はどうかと問われるならば、ニーチェの梅毒が第四期(進行麻痺)に入ったのは、即ちスピロヘータが彼の脳灰白質を侵し始めたのはイエーナを退院してナウムブルクの母親のところに移ってからのことであり、1月3日の発狂は精神分裂であったろう、と筆者は答えたい。ニーチェは発狂後も数年の間は理性的な面を保持していた。筆者がそう認めるのは、妹の自己本位な数々の作り話によってではない。たとえばパーゼル入院の時にオーヴェルベックは、ニーチェが病院長ウィレを正確に覚えていることに驚いたのである(ただし「精神病医」が自分自身に何らかの関係があるとニーチェが感じた様子はなかった⁽⁴⁾)。その他多くの確かな証拠があるのであって、特に母親がオーヴェルベック宛に書き続けた病状報告は貴重な資料である。ただし筆者の見解も絶対的確定性を主張することは出来ない。ニーチェが全く梅毒ではなかったという奇跡だって無いとは言えない。

しかしながら、ニーチェが梅毒を意識していたこと、梅毒意識に苦しんだのであることは絶対的確定である。証拠を筆者は既に十分に挙げたと思っているけれど、もう一つ加えることにする。「曙光」54番である。「病気についての考え!」——病人が少なくとも今までの様に、病気そのものによってよりも、自分の病気についての自分の考えによって一層多く悩まねばならない

ということがない様に、病人の空想を鎮めてやること、——思うに、これは重要なことだ！そしてつまらぬことではない！諸君はこれで我々の課題がお分りか？」。これは、自分の病気の性質を知らなかった者の述べる言葉ではあり得ない。ニーチェを悩ませたのは病気そのものよりも、その病気についての色々な考えであったのである。道徳的罪とされている病気を問題とせざるを得なかったところから彼の課題が生れてきたことを暗示しているこの箴言は、彼の全著作中で最も冒険的なものの一つであると思う。

知的誠実さからクリスト教を離れたニーチェは稀に見る誇り高い人間であり、隠さねばならないものを持ち続けることは堪え難い恥辱であった。ニーチェが悲惨な生活に堪え続けたのは、復権のための自己正当化を為し遂げなければ死んでも死に切れなかったからである。梅毒の悩みからクリスト教絶滅という課題が生じたのであることは「人間的」Iを読めば、それ以前の遺稿に触れなくても十分に納得されるであろう。132番から134番までは特に参考になる。その中の133番の末尾のみを挙げるならば、「さらに最後に、あらゆる行動の絶対的必然性とそれらの完全な無責任性に関する哲学的確信を獲得して血肉に取り入れることに人間が成功するならば、良心の苛責のあの残りかすも消失してしまう」。

73年以來の地下的思考の成果である「人間的」Iは、彼が如何に大きな計画のもとにクリスト教道徳との戦いに入っただけを示している。上の引用文だけでも、良心の苛責を失わせるためには「無責任性」を必要とし、そのためには「絶対的必然性」を必要としていることが理解される。必然性は因果と関係しており、責任の問題は個人道徳の範囲内だけでは論じ得ない。かかる次第でニーチェは哲学の全分野に亘っての自身の知識の総点検をし、新しく学び加える必要があった。一切が彼の良心回復のためだったのであり、「人間的」以後の彼の著作は凡て、道徳的色彩を帯びることになる。彼が薬（或いは毒）として持ち出す「永遠回帰」、「権力への意志」、「ディオニュソス」等も例外ではない。クリスト教道徳という伝染病の息の根をとめるためにのみニーチェは彼の後半生を生きたのである。

ニーチェは二重の病気との戦いを戦い抜き、戦い終えた者の勝利感と絶望感とを味わった後に発狂した。「コノ人ヲ見ヨ」の最後から二番目の節⁽⁵⁾は真に涙ぐましいものであり、その中にこういう言葉がある、「真理の稲妻は、まさに、これまで最高の座を占めていたものを打ったのだ。それによって何が破壊されたか、それが分る者は、そもそもまだ何か自分の手に残っているものがあるかどうかを、よく目をとめて見るがよい」(岩波文庫、手塚富雄訳)。何が破壊されたか？彼は知っていた。彼は彼の内なるクリスト教と戦ったのであり、この戦いは、彼自身が破壊し尽くされるまでは終らない戦いであった。

何が残ったか？一人の天才的人物が業病に罹ったために傲慢 Hybris⁽⁶⁾と良心との戦いの中で苦しみ抜いたという事実である。そして、その生涯が生んだ「他の何ものによっても当分取り換えの利かない一片の文化」(1887年4月14日、オーヴェルベック宛)である。

注

(1) 「ノルデン」第8号所載拙稿の注3を参照されたい。

(2) 「確実性 Gewißheit」に対するニーチェの気分の変転は不確実のための悩みを示す一例である。「人間的」から「悦ばしき知識」までのニーチェは「確実性」を求め、「確実性への欲求」を高く評価している（「人間的」I, 635節 同書IIの2, 145節 「悦ばしき知識」第1書2節）。遺稿の中にはこんなものもある、「懷疑家は時々大いに乱痴気騒ぎをやる必要があるであり、それから再び心静かに『もしかするとそうであるが、違うかも知れないもの Vielleicht-und-Vielleicht-auch-nicht』の國へ戻って行く……」（KGW V 1, 10 [F 101]。80年春—81年春のもの）。次の箴言は彼の悩みが二重であることを示している。「道德的諸徴候は病気の歴史と同様の歴史を持っている。即ち、最初は外部からのもの、超自然的な力の作用によるものである。次には、全く人間的であるが向自的なもの、『道德的なもの』である。遂にはこういうことが分る、つまり道德的徴候は病気（これについては各人が自分の意見を持っており、分別に富む者は沈黙によって自身を際立たせる）と同じく不正確にしか特徴づけられていない事象なのだ—大いなる懷疑の時がきているのだ！—ということが」（ebd. 7 [231], 80年末のもの）。

しかしツァラトゥストラ時代には様子が違って来る。グロイター版では82年後半と83年との遺稿が未刊行だから84年のものしか紹介できない。何れも84年夏—秋のものである。

26 [280] 我々は「確実性 Gewißheit」に対して違った立場にある。恐怖が人間に植えつけられてからは実に久しいのであり、耐え得る生存は凡て「確かさの感情 Sicherheits-Gefühl」と共に始まったのであるから、この感情は今もなお思想家に影響し続けている。しかし生存の外的「危機」が後退するや否や、不確かさ Unsicherheit の享樂、地平線の無限さの享樂が始まる。確実性への努力をしている大発見家たちの幸福は今や、到るところに不確実性 Ungewißheit と冒険 Wagnis とを指摘することの幸福に変わるかも知れない。

26 [283] においては、「永遠回帰思想に堪えるために」必要なものとして、道德からの自由、苦痛という事実に対する新しい手段（苦痛を道具として、快樂の父として把握すること）などと共に「あらゆる種類の不確実性、実験可能性の享樂」が挙げられている。（永遠回帰の教えは道德からの救済手段であった筈なのに、ここでは逆に、道德からの自由がそれに堪えるための薬として要求されている。）

26 [284] では、堪える手段として、あらゆる価値の転換が挙げられ、その例としての、確実性から不確実性へ、因果から不断の創造性へ、保存意志から権力意志へ、などの転換が列挙されている。

26 [301] 真理と確実性とへの意志は恐怖から発する。

以上によって見るに、理由の差はあれ、ニーチェは「真理と確実性とへの意志」から離れている。このような考えから生れたツァラトゥストラ第四部の「知識について」は実に読み甲斐がある。

序でに Gewißheit と Sicherheit との違いについて一言しておきたい。「偶像の黄昏」の「哲学における理性」第5節で「理性カテゴリーの取扱いにおける Sicherheit, 即ち主観的 Gewißheit」とニーチェ自身が言っている様に Gewißheit は客観的、科学的であり、Sicherheit は確実性の意識、無垢の意識であり主観的である。だから Sicherheit は、確信、自信、安心、安定、安全などと訳す方がよい場合が多い。しかし上掲の26 [280] の場合は、「確実性」に近い日本語を選んで「確かさ」と訳しておいた。

「善悪の彼岸」は冒頭から「不確実性」への意志の様なものを持ち出している。「悦ばしき知識」第5書（1886年）347節、375節も同様である。ニーチェは Gewißheit を二流の問題と考えて、Sicherheit の問題にのみ関わる様になって行った。（vgl. KGW VIII 1, 2 [169]）。しかし「不確実性」の悩みが終ったところではない（vgl. VII 3, 38 [20]）。

88年春の遺稿 KGW VIII 3, 14 [156] は、七章から成る主著の構想であるが、最終章「われら極北族」の項にはこう書かれている、「絶対的な状態のみを、例えば幸福！例えば巨大な享樂の歴史と終末における凱歌を、明らかな然りと否とのみを持つこと…不確実性からの救済！」。

「コノ人ヲ見ヨ」にはこうある、「私はシェイクスピア以上に心を引き裂く読物を知らない。こんなにまで道化たることを必要とするには、一人の人間がどんなに悩んだに違いないことか！—世の人はハムレットを

理解しているだろうか？狂気ならしめるものは、疑惑ではない、確実性なのだ…しかしそう感ずるためには、人は、深くなければならぬ、深淵であり哲学者であらねばならぬ…我々は皆、真理を恐れている…」。

確実性がニーチェを最初に襲ったのは初感染の時であり、「悲劇の誕生」は既に狂気的要素を持っていた。同書第7節には、「物凄い真理」を見抜いたハムレットが出ている。真理とは何か。それは、シレノスと言った言葉である（同書第3節参照）。「物凄い真理」を知って以来、ニーチェは「知は呼吸をふさぐ」（「ツァラトゥストラ」第三部「恢復しつつある者」参照）の想いをどれほど味わってきたことか。「確実性」がニーチェを狂気にし、「不確実性」がデカダンのにしたと言っていよいと思う。ニーチェは最後まで両方であった。

(3) vgl. Podach, ebd. S. 162ff.

(4) vgl. Bernoulli II, S. 235 u. Podach, ebd. S. 106

(5) KGW VI 3, S. 371f. グロイター版の編者は苦勞して「コノ人ヲ見ヨ」を復原したが、この節は従来のものと同じである。

(6) Hybrisの語は「ギリシャ悲劇の時代の哲学」第6節の終りのところに出てくる（vgl. KGW III 2, S. 323f.）。このヘラクレイトス解釈は眼痛のニーチェの地下的思考の産物であり、余人には不可能な解釈であろう。

10. 隠匿、沈黙、仮面

この表題は人間存在の根本条件に関係するものであるから幼少年時代のニーチェについても考察することが望ましいのであるが、それは省略せざるを得ない。とに角、キリスト教から離れた後のニーチェは色々なことを隠したに違いないが、それは特別なこととは言えない。しかし梅毒意識となると事態が違ってくる。「25歳で悲劇の誕生を構想するためには、自身の中で何たる体験をしておらねばならぬことか！」（86年夏—87年秋の遺稿⁽¹⁾）。

1873年までのニーチェは凄まじい理想主義者であり恐るべき時代攻撃者であった。しかしそれは一種の自己欺瞞であった。無論ニーチェは意図的にその道を選んだのである。「自分自身をだまし得ること」が詩人の「理想」である、と当時のニーチェは書いている⁽²⁾。当時のニーチェの隠匿について述べることは楽しいことでさえあるかも知れない。「ギリシャ人は存在の驚くべき恐るべき事どもを知っていたが、生き得んがためにそれらを蔽い隠したのである。ゲーテの象徴に則れば一つの十字架をバラの下に隠したのである」（1870年6月の「ディオニュソスの世界観」第2節⁽³⁾）。

眼痛以後にはニーチェの理想主義は萎える。彼は自分自身と対決しなければならない。78年夏の遺稿、「ギリシャ詩人に関して言えば、我々は、我々自身をだますことを教えられた。ひとりひとり、『これは私は気に入らぬ、あれは私には関係がない、それから受ける私の感じは従来の評価には反する』と言う様になるべきだ——そうすれば文献学者は正直な人としてもっと尊敬されるのではなからうか、その古典的趣味が疑われる危険に陥るとしてもだ⁽⁴⁾」。

眼痛以後のニーチェの隠匿は真剣なものである。それまでは、彼が口を割らなければ病気が

ばれる恐れはなかった。しかし今は、疑いの眼で見られているのだ、他の人たちは知っていて知らない様な顔をしているのだ、という猜疑心が彼を苦しめた。76年夏の遺稿、「我々は最も身近な者の憎しみの気持を恐れている。彼がその気持の故に我々の秘密を嗅ぎつけて、我々が我々自身を軽蔑している如くに我々を軽蔑するようになることを我々は知っているからだ⁽⁵⁾」。同じ時期のもの、「このクリスト教徒的慰めを持たず、他方、哲学が完全な無責任性というお返しをしてくれない人間は、具合が悪い。彼は自分自身を知り過ぎる位に知っており、そして自分の本質を誤って罪と考えているものだから自分自身を軽蔑している。それで彼は、自分の秘密を嗅ぎつけられないかしらと不安の眼で仲間を見る⁽⁶⁾」。ニーチェは彼の哲学によって堪えていた、快活を装ってさえた。「人間的」以後の著作は、彼の内心の苦悩に対する処方であった彼の哲学を読者の前に提出している、ただし苦悩の根源を隠しながらである。

ニーチェの隠匿、沈黙、仮面の類はニーチェ研究書の凡てが取扱っていると云ってもよい位にニーチェの著作の顕著な特徴であり、それがまた魅力であって、多くの読者をひきつけてきた。ニーチェは魅力的な謎であった。理解不可能なものは魅力がある。

「善悪の彼岸」42節における「哲学者の新種族」は「何らかの点において謎であり続けることを欲している」のであり、「誘惑者」なのである⁽⁷⁾。同書は全体が誘惑の書である。仮面と仮装とを楽しんでいるかの如くであり、また、苦しまぎれのおしゃべりであるかの如くである。しかし読者の心を静まりかえらせる時がある。既にその末尾を引用した289節⁽⁸⁾は特に素晴らしい。「隠遁者」、「新しい、一層危険な種類の沈黙、黙秘」、「洞穴」、「迷宮」等々の言葉を挙げるだけでも魅力が感じられよう。その中にこういう文がある。「人は自分の内に秘めているものを隠すためにこそ本を書くのではないか？」。

ニーチェが何かを隠しているのだということはニーチェ読者の誰しもが直ちに感づくことなのであるが、ニーチェの隠し方が巧妙であるために、彼が何を隠しているかは誰にも分らなかった。彼はしゃべりまくったと言ってもよい位に語り続けたのであり、そのために読者の方は混乱させられてしまったのである。ニーチェはうまくやったのである。

88年3月頃ニーチェは、彼が計画していた「権力への意志」のための序文草案を二種類作っており、先に作った方のものが、妹のいわゆる「権力への意志」の序文として採用されたのであるが⁽⁹⁾、その第1節はこうである。「大いなる事物が要求するのは、それらについて人が沈黙するか、大いに語るかである。大いにとは、即ち、シニカルにそして無垢にということである⁽¹⁰⁾」。ニーチェはまさしく大いに語ったのであるが、沈黙を宣告された一つのことだけは隠し続けた。即ちニーチェの沈黙は、だまりこくっている沈黙ではなかった。その様な沈黙は却ってばれてしまう。ツァラトゥストラ第3部の「橄欖山にて」によれば、彼の沈黙は「長い明るい沈黙」であって、沈黙すべきことを口に出すことは決してしないけれども、それ以外のことは快活に語り、「言葉とさいころを音立ててもてあそびながら、いかめしい監視者たちをたばか

る」のである⁽¹¹⁾。

ニーチェの口の堅さについてはオーヴェルベックがこう述べている、「……まさにこれ〔異常な話し好き——訳者注〕が、同様に異常な『閉鎖性』と結び付いていたのだった。他の人たちなら独りでしまっておくのが普通である様な『心の秘密』をどれほど多く彼から聞いた人があらうとも、彼は決して『心を舌の上に持つ』人間ではなかった。強い関心を抱いているものをこそ彼は比類ない精力をもって制御した。それは非常な力で彼からほとぼしり出たけれども、また、他の如何なる人に保管されるよりも安全に保管され得た⁽¹²⁾」。

ニーチェの著作の中から印象の強いものを若干挙げてみたい。

「人間的」I, 65 番には「正直が導いて行くかも知れない場所」として「社会からの追放」、「牢獄と早死」が挙げられている⁽¹³⁾。

「曙光」299 番はこうである。「誇り。——ああ、諸君は皆、拷問された者が拷問のあとで自分の秘密を抱いたまま独房へ連れ戻される時にどんな感情を持っているかを知っていない！——彼は依然として歯をくいしばって秘密を守っている。その人間的な誇りの歓喜について諸君が何を知っていよう！⁽¹⁴⁾」。

「悦ばしき知識」338 番、「我々が最も深くそして個人的に悩んでいる事柄は殆ど凡ての他の人たちに理解不可能、到達不可能である。この点で我々は最も身近な人にも隠されている、たとえその人が我々と一つ釜の飯を食べていようとも⁽¹⁵⁾」。

拾っていたら切りがない。最後に 85 年秋から 86 年秋までの間の或る遺稿断片から、ごく一部を紹介したい。グロイター版 VIII 1, 2 [33] であって、これは本当は全体を載せたいのである。グロース・オクターフ版第 13 巻 285 頁の 692 番に、つぎはぎ細工が載っており、その一部をヤスパースが彼の著の 403 頁で引用しているものである⁽¹⁶⁾。「我々是我々が恐れているところの一つの知を持っている様に見えないか。我々がそれとだけ一緒ではありたくないところの、その圧力で我々が震え、その囁きで我々が蒼白になるところの一つの知を。……我々は自分自身が余にもこわれ易いことを、もしかするともうこわれてしまっていて不治であるかも知れないことを知っている様に見える。我々は生のこの手が我々をうちこわすに違いないことを恐れている様に、そして生の仮象へ、生の虚偽へ、生の表面と華やかな欺瞞の中へ逃げて行く様に見える。我々は非常に悲しいために快活であるのだ、という様に見える」。これはほんの一部なのである。ニーチェの「地下的で、隠されていて、黙っていて、発見されずにいる孤独⁽¹⁷⁾」の辛さについてさらに述べるには及ばないと思う。彼の生活、彼の著作の一切が彼にとっては仮面であった。彼は、隠さなければならなかったのである。

非人間的なものに苦しめられつつ独りで堪える時には自分も非人間的になり兼ねない。むしろ、そうになってしまうのが普通と言うべきかも知れない。しかしニーチェは、ならなかった。彼は最後まで堪え続け、苦しみ続けた人である。自身の思想にも、最も悩んだのはニーチェそ

の人である。いわゆる「ニーチェ思想」といわれているものの如きは彼の「前景の思想」の変種に過ぎない。彼は前にも後にも出口がなかったのである。ニーチェの梅毒意識を考慮しつつ彼の著作を読む時には、読者は行間を読む。そして、ニーチェの苦悩が類を絶したものであることを改めて納得する。この様に悩むことが出来るということは偉大である。ニーチェは偉大であった。筆者は彼の苦悩の前には頭を垂れる。

注

- (1) VII 1, 5 [79]。なお、次の様なものもある。「26歳で悲劇の誕生を書き得るには、何たる体験をしておらねばならぬことか」(ebd. 5 [103])。
- (2) vgl. GOA IX, S. 120. 「悲劇と自由精神」のための諸想。
- (3) KGW III 2, S. 52. 同年クリスマスにコーズィマ・ワグナーのために書いたものは少し違っている。vgl. ebd. S. 80. なお、バラは医学的には紅疹を指す。
- (4) KGW IV 3, 30 [25]
- (5) KGW IV 2, 17 [14]
- (6) ebd. 18 [32]
- (7) vgl. KGW VI 2, S. 55
- (8) KGW VI 2, S. 243 f
- (9) あとの方のものは、その一部をニーチェ自身が「アンティクリスト」の中で使ってしまったから採用するわけには行かなかった。
- (10) KGW VIII 2, 11 [411]
- (11) vgl. KGW VI 1, S. 216
- (12) Bernoulli I, S. 136 f.
- (13) vgl. KGW IV 2, S. 77
- (14) KGW V 1, S. 199
- (15) KGW V 2, S. 246
- (16) 「仮面の必然性と真理」についての項。引用頁数が385となっているのは誤植であろう。
- (17) 「悦ばしき知識」(第5書, 1886年) 365番。KGW V 2, S. 295

あ と が き

ニーチェは筆者にとって殆ど唯一の慰めであった時もあるが、今はニーチェについて考えることも書くことも苦しい。しかし、梅毒意識(懸念, 不安, 恐怖)という想念が突如筆者を襲ってから四年余の歳月が過ぎてこの観点は今は筆者の確信となってしまっていると言ってよい状態であり、これをわが国のニーチェ研究界に差し出して批判を得たい気持ちがペンを進めさせた。一応の体裁を整えてほっとする。梅毒がクリスト教世界から蒙っている恥辱をそそぐことがニーチェの思想の核を成しているという点について書き足らなかったのは残念であるが、研究者諸士と共に今後を期したい。

Nietzsches Syphilis-Bewußtsein

Takeshi KOUCHI

1. Nietzsche kämpfte gegen eine doppelte Krankheit an, nämlich gegen den Wurm (oder Parasiten) und gegen sein schlechtes Gewissen.
2. Seine Traurigkeit kam daher, daß er sich als „alten Sünder“ verstand. Vgl. Gruyter-Ausgabe VIII 3, 15 [84].
3. H. W. Brann schrieb im Nachwort seines Buches „Nietzsche und die Frauen“ (1931), Nietzsche habe nirgends auch nur ein Sterbenswörtchen von dieser Ansteckung oder deren Folgen erwähnt oder auch nur angedeutet. Aber Nietzsche hatte davon überall Andeutungen gemacht.
4. Gegen *Spirochaeta pallida* gab es damals kein vollkommen wirksames Mittel. Außerdem war Syphilis eine Krankheit, über die man schweigen mußte.
5. Nach der ersten Ansteckung geriet Nietzsche in dionysische Stimmung.
6. Die Entwürfe zu „Empedokles“ und das Erstlingswerk „Die Geburt der Tragödie“ sind voller Andeutungen.
7. Der im Frühling 1873 begonnene Augenschmerz ließ ihn glauben, daß seine Syphilis ins tertiäre Stadium eingetreten sei. Er hatte bis dahin nie solche Augenschmerzen gehabt. Seine Schwester änderte die Tatsache von seinen Kopfschmerzen in Augenschmerzen (durch die Verfälschung seiner Angabe. Vgl. Das Leben Friedrich Nietzsches, Bd. 1, 1895, S. 77). Ihren verschiedenen Aussagen über Nietzsches Augenschmerzen ist keinerlei Glauben zu schenken.
8. Das geistige Leiden nach dem Augenschmerz (1873).
9. Das Syphilis-Bewußtsein und die Moral.
10. Versteckung, Schweigen, Maske.

In Nr. 54 von „Morgenröthe“ fragt Nietzsche: „Versteht ihr nun unsere Aufgabe?“ Der Verfasser dieser Abhandlung antwortet: „Ja“, da er nun weiß, daß Nietzsche selbst „mehr von seinen Gedanken über seine Krankheit als von der Krankheit selber zu leiden“ hatte.

In Nr. 42 von „Jenseits von Gut und Böse“ sagt Nietzsche: „Es gehört zu ihrer (der zukünftigen Philosophen) Art, irgend worin Räthsel bleiben zu wollen.“ Aber der Schlüssel zum Rätsel Nietzsche ist endlich gefunden. Ohne diesen Schlüssel würde sein Leben und Werk nie gänzlich erklärt werden.

Der Verfasser legt zuerst den japanischen Nietzsche-Forschern seine Meinungen vor. Wie würde er bei den ausländischen Forschern irgendein Verständnis dafür finden können, wenn er seine Landsleute von der Sicherheit seiner Gesichtspunkte nicht überzeugen könnte?

Der Verfasser dankt der Basler Tradition der Nietzsche-Forschung und den Herausgebern der Gruyter-Ausgabe.